



よりよい我がまちをめざして

四郷まちづくりのあゆみ

四郷まちづくりのあゆみ
よりよい我がまちをめざして



「四郷まちづくりのあゆみ」編さん委員会
令和7年(2025)3月

四郷

まちづくりの

あゆみ

よりよい我がまちをめざして





刊行のごあいさつ

「四郷まちづくりのあゆみ」

編さん委員会委員長

梅村 利幸



先人の思いをつないで

「四郷まちづくりのあゆみ」発刊にあたり、ごあいさつ申し上げます。

本書は、よりよい我がまちを、との思いと共に、四郷の人々が取り組んできたまちづくりの軌跡をたどっています。猿投神社に伝わる祭礼記によりますと、「四郷」は今から676年前の貞和5年（1349）にその名が記録されている由緒ある地です。明治期に実業家の井上徳三郎が青木原一帯を開墾したことで四郷は東に広がり、農

業が中心の地域となりました。昭和のは場整備事業によつて農地は改良され、平成になる頃に愛知環状鉄道・四郷駅が開設されます。そして、およそ8年に及ぶ「豊田四郷駅周辺土地区画整理事業」が令和5年に完工し、利便性の高いまちへと生まれ変わりました。

私がまだ若かりし頃、年配の方々は口をそろえて言っていたものです。「この辺りはいいところだで、おまえたちがまちを作っていけよ。駅もできるし、何とか開発していこうよ」と。今日の四郷の発展は、そうした先人たちの熱意、進取の気風があつてこそ。そのご苦労に心より敬意と感謝を申し上げます。

「自分たちのまちを、自分たちの手で豊かにしていこう」との気概を持つてまちづくりに取り組んできた先人たちの足跡をまとめ、後世に伝え残したいとの想いから、このたびの発刊となりました。新たに四郷の住民となった皆さまにとっては、まちの将来を考えるきっかけとなれば幸いです。

結びに、まちづくりにかける情熱が次世代に引き継がれ、さらなる発展につながることを願つてやみません。また、本書の発刊にあたりご協力賜りました皆さまに、厚く御礼申し上げます。

発刊を祝して

豊田市長 太田 稔彦



このたび、「四郷まちづくりのあゆみ」が発刊されますことを、心からお祝い申し上げます。

本書は、豊田四郷駅周辺土地区画整理事業の竣工にあたり、これまでの四郷駅周辺地区のまちづくりを記録し、これからのまちづくりに生かすことを目的に発刊されました。

昭和40年代のは場整備に端を発した、永きにわたる四郷駅周辺地区のまちづくりに対する皆さまの熱意はひとかたならず、平成20年に四郷駅周辺居住誘導拠点決定を受けると、スピード感をもってその実現へと取り組まれました。

現在、本市では、「つながる つくる 暮らし楽しむまち・とよた」を将来像に掲げ、「つながり」によって多様な価値や可能性を創造するまち、「チェンジ(変化)」と「チャレンジ(挑戦)」によってしなやかに変化し続けるまちを目指し、第9次豊田市総合計画の策定に取り組んでいます。

本書が、四郷地区のまちづくりの変遷を紐解き、地域の皆さまがまちの将来像を描く助けになることを期待します。

最後に、土地改良事業をはじめ、歴史に関する貴重な資料をご提供いただいた福岡銃二氏、本の発刊に尽力されました編さん委員会の皆さまに深く感謝申し上げます。ごあいさついたします。

まちづくりの完成を祝って

豊田市長 加藤 正一
(6代目豊田市長)



私たちの日常生活において一番の魅力は、充実した生活文化と食文化を享受できるまちの存在です。その望みを満たすまちが四郷地区に実現いたしました。この喜びは四郷地区の皆さまのみならず、豊田市民にとつての喜びでもあります。生活の利便性が一層向上した四郷地区の皆さまには、心よりお祝いを申し上げます。

同時に、この成果を迎えるまでには、関係者の皆さま方に多大なご苦労があったことと拝察いたします。

特に、平成10年の猿投地区まちづくり協議会の発足から、平成20年に四郷駅周辺が居住誘導拠点として決定されるまでの10年間、役員をはじめとする関係者の皆さまには並々ならぬご努力があったこととお察し申し上げます。皆さまのまちづくりにかける想いは熱く、花本産業団地の造成や名鉄の高架事業をはじめとする交通インフラの拡充等、市の事業においてもひとかたならぬお力添えをいただきました。そのご尽力、ご苦心が実を結び、今日の成果につながったことに深く感謝いたします。

この事業は猿投地区のみならず、豊田市北部の保見や石野、さらには藤岡や小原といった広範なエリアにも影響を及ぼす、まさに豊田市全体のまちづくり事業であります。

改めまして、四郷地区の皆さまに心からのお祝いを申し上げます。

新四郷の誕生を祝す

豊田市長 鈴木 公平
(7代目豊田市長)



新しいまちは、そこに住む人々たちによってこそふさわしいまちとして誕生していく……と改めて私は強く感じました。

1988年に開業した四郷駅は、それこそ田んぼの中にポツンと立地していました。「このままでいいわけではない」と地域の人々は動き出しました。駅を生かした新しいまちをつくるか、美田を残し先祖から受け継いだ米作りを続けるか、悩みは深く議論は夜を徹して続いたと後に知りました。

今、四郷駅を中心にして高層ビルが立ち並び、商業、医療、防災など拠点機能も整い、多くの人たちが暮らす新しいまちが誕生しました。

私は、この歴史的事業に深くかかわった人々たちを知っています。その中には地域の歴史を掘り下げ、自ら研究し、先人の果たしてきたまちづくりのあゆみの中から、これからのまちのあり方を導き出そうとひたすら努力してきた人もいます。

その熱意と努力、そして信念ともいえる行動力に改めて深く敬意を表します。

これからの世代を超え、その情熱は引き継がれ、ここに暮らす人々による時代に即したまちづくりへの挑戦が続けられていくと信じます。

四郷のこれから

時代の移り変わりと共に発展を遂げてきた四郷。平成27年(2015)から進められていた「豊田四郷駅周辺土地区画整理事業」が令和5年(2023)に完成し、利便性の高い活気あふれるエリアとなった。新たなステージに入ったといえる状況をどのように捉えているのか、今後の展望を含め語っていただいた。



生活に必要な施設が徒歩圏内に

◆梅村 これほどまでに魅力が上がり、価値の高いまちとなったことに驚いているところです。私も地権者の一人なので、計画がパルクするんじゃないか、途中で業者が撤退したらどうなるのか、そんな不安が一時はあったんですけどね。

◆梅村 国交省が掲げるコンパクトシティ構想の流れもあるでしょうね。郵便局も病院もスーパーも歩いていける範囲にあつて、非常に便利で住みやすいまちになった。

◆杉浦 昔、四郷地区は猿投町の中心地で、そのころの賑わいが戻ってきた印象がありますね。

◆磯村 今まで福祉施設や商業施設を誘致する話があつて、そのたびにみんな判を押しとるもんね。どれも実現せずにきたけど、今回の区画整理事業が初めて目の目を見た。しかも当初は宅地が中心で、高層マンションや大きな店舗が建つ計画じゃなかったんだよ。業者が主導して価値のあるまちづくりをしてくれた。もちろん、僕たちも協力したわけだけれど。

◆福岡(谷) 規制がかっているから、未開発の土地がいっぱいあつたもんね。タイミングもよかった。この辺りで工事が始まった途端、向こう側にスーパーや店屋ができて、思わぬ宣伝効果があつたというか、あれを区画整理事業だと思っている人も多いもんね。

◆磯村 相乗効果で両方ともすごい人だもんね。おかげで下古屋だけでなく天道や井上地区でもミニ開発が進んで、空き地だったところにどんどん住宅が建つた。

◆井口 確かに生活するには便利になりました。

◆梅村 でも、最初の頃はきつかったですけどね、地権者の方によく怒られて。周知したときも「先祖様から授かった土地をどうしてくれるんだ」「自分のところはどくなるんだ」とね。農家は米を作ると赤字の時代だから、農地としては持ちたくない。ほとんどの人は商業施設や公共施設になることを望んでいたと思う。

◆杉浦 天道地区は兼業農家が多かったこともあり、この事業についてもご理解していただいたと思っています。

◆福岡(谷) 賑やかになって思うのは、便利になったことで自分の子や孫の世代が住み続けてもいいと思ってくれるんじゃないかなと。

◆加藤 区画整理事業としてやったことがよかったんじゃないですか。地権者の方がそれぞれ切り売りしてさまざまな開発業者さんに渡ったりすると、こうした整った町はできなかったと思います。

整備が進む周辺道路

◆磯村 区画整理事業のおかげで周辺道路の整備が進んだこともありがたかったね。

◆福岡(信) 交差点の改良もそうだし、419号に右折レーンができることによって渋滞がかなり緩和されるので本当にありがたい。県道の整備も期待しています。

◆井口 住宅街なんかは抜け道に使われているところが多いので、心配ですけどね。また工事が途中のところも多いので、完成によって渋滞がどれくらい解消されるか…。

◆杉浦 中心地(商業地域)から少し離れてしまつと整備が行き届いていないところもありますよね。我々の年齢だと運転免許証を返納している人もいますので、歩道などの整備をしてもらえるとありがたいですね。

時間をかけて地域コミュニティを育む

◆磯村 新しく来た人がどういう人なのか、ちよつとわからない。

◆福岡(信) 融合には時間がかかるだろうと思う。旧住民と新住民はPTAや子ども会などを介して知り合つていき、徐々に時間をかけて馴染んでいくんじゃないかな。

◆福岡(谷) 子ども会には入つてくれる？

◆福岡(信) すごく増えた。

◆磯村 8月の盆踊りはものすごくたくさんの方が来てくれたよ。

◆福岡(信) イベントをやれば人は来てくれるけど、果たしてそれがまちづくりや融合につながるか…。でも、来てくれるのはありがたいこと。「棒の手」もあるので、そうした行事や子ども会を通じて保護者同士が知り合つてくれたらいいと思う。

◆磯村 ほかの自治区と違って、こは「棒の手」という世代間交流できる場があるから本当にありがたい。

◆杉浦 天道は私が覚えていた限り1000〜1200軒くらいしかなかったと思います。それが今は9000〜10000軒くらいあると思います。この事業の話があつたとき、転入して来た方々が30〜40年ほど経つて同じ目線でまちづくりについて話ができる感じなんです。だから長い目で見ていかなきゃいけないだろうと思いますね。

◆加藤 何年かかるかわかりませんが、「棒の手」や学校や子ども会を介して自然に取れんしていきんじゃないでしょうか。ただ、昔のように全日の行事は無理ですね。

◆井口 僕はよそから来た人間ですが、ここに来てもう30年になります。いちばん思うのが、自治区の行事に参加する顔ぶれがずっと変わらないこと。うちの親父と同世代の方々が必ずお見えになるんですよ。たまには息子さんに「行つていこ」と言ってもらえると新たな顔見知りが増え



座談会メンバー

- 〈左から〉
- ◆梅村利幸委員長(豊田四郷駅周辺土地区画整理組合理事長)
 - ◆福岡谷雄副委員長(豊田四郷駅周辺土地区画整理組合副理事長)
 - ◆杉浦克彦委員(豊田四郷駅周辺土地区画整理組合副理事長)
 - ◆磯村貴史委員(豊田四郷駅周辺土地区画整理組合代表監事)
 - ◆福岡信明委員(下古屋自治区区长)
 - ◆加藤勝委員(下古屋自治区副区長)
 - ◆井口太宏委員(下古屋自治区副区長)



て、輪が広がると思うんですけどね。

◆梅村 世代交代というのはなかなか難しい。さじ加減がね。

◆井口 公園の整備についてのワークショップには、結構若い世代が参加してくれましたよね。

◆加藤 皆さん、活発に意見を言ってくれましたよね。守つていくべき行事もありますけれど、それとは別に若い人たちの声を吸い上げる場、機会があるといいですよ。

◆福岡(信) 磯村さんが最近「下古屋の環境を守る会」という自主的なグループを立ち上げたけど、若い世代からそうした動きが自発的に起きてくるかというと、疑問かな。

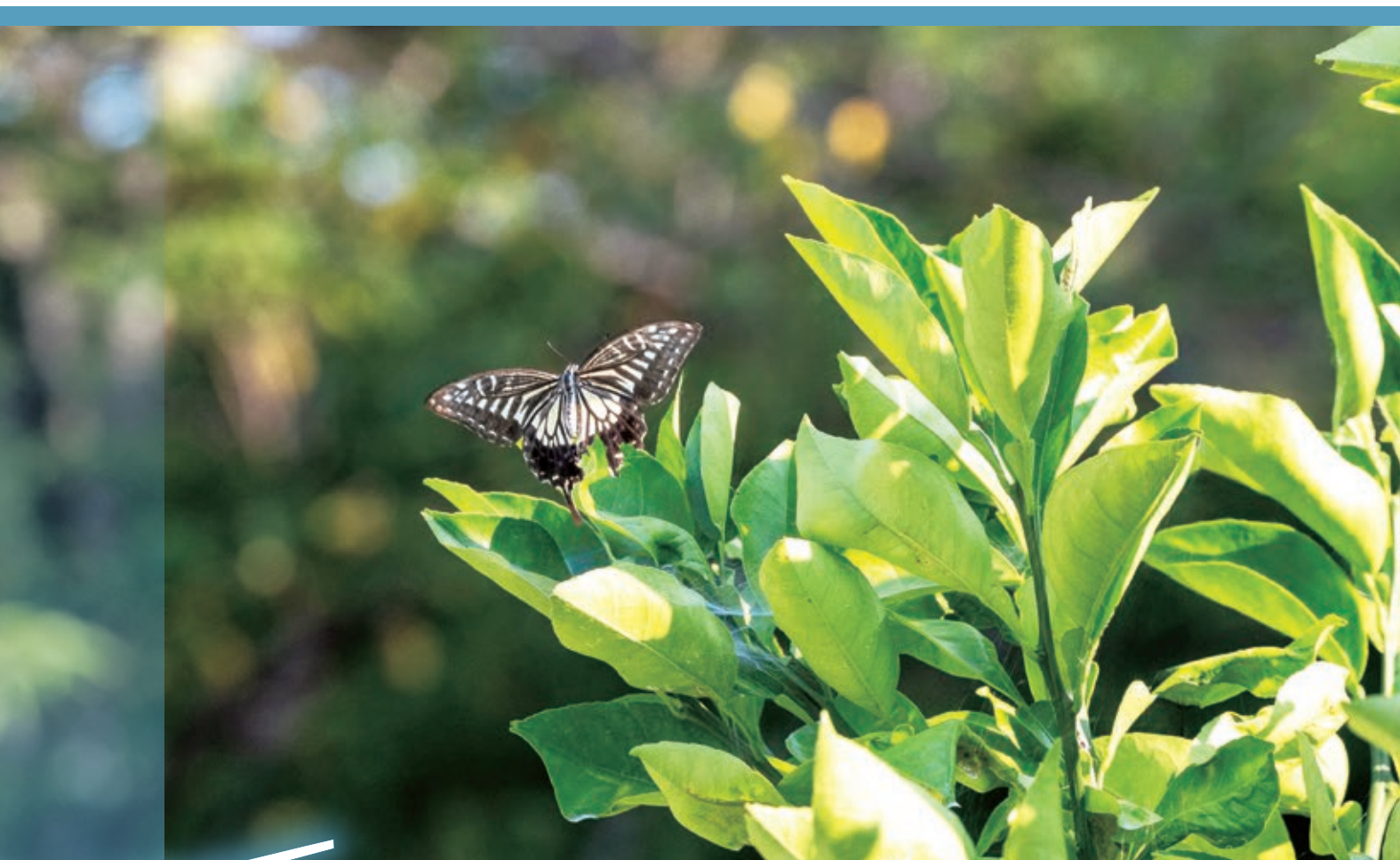
◆磯村 今ある組織を活用して活動を展開してもらえたらと僕は思っている。もちろんいろいろな考えがあるから強制はしないよ。ただ、間口は広げておきたいなと。

◆加藤 そうした自主グループがあることをもう少し宣伝してもいいんじゃないでしょうか。

◆福岡(谷) 自分の子どもを見ていると基本的に価値観が違うので、そういうのを押しつけても仕方ないと思う。ただ、ここに住んでよかったと思える、居心地のいいまちになつてくれればいい。もちろん、磯村さんみたいに働きかけをする人もいないとね。その気になつてくれる人もいるかもしれないし。

◆井口 若い世代、新しく来た住民の方にはいろいろな行事に少しでもいいから参加していただきたいですね。「参加しろ」じゃなくて、「来てください」という感じ。そうすれば、自ずとまちが変わっていくんじゃないかな。

◆梅村 まちづくりへの思いを四字熟語で表すと「温故知新」。古いものを尊び、新しいものを創つていく。それが、今いる人たちの使命ではないでしょうか。先人が強いリーダーシップを発揮して創り上げてきたまちを新しい世代が受け継ぎ、よりよいまちにしていってもらえたらと思います。



四郷の四季

春
Spring



浦野酒造の軒下に揺れる杉玉



下古屋・藤牧検藤流の棒の手



冬

Winter



地元有志による四郷駅前イルミネーション

秋

Autumn



大悲殿東昌寺の紅葉

目次

ごあいさつ 2

刊行のごあいさつ 梅村利幸（「四郷まちづくりのあゆみ」編さん委員会委員長）

祝辞 豊田市長 太田稔彦

..... 豊田市名誉市民（6代目豊田市長） 加藤正一

..... 豊田市名誉市民（7代目豊田市長） 鈴木公平

特別企画 「四郷まちづくりのあゆみ」編さん委員会座談会

四郷のこれから 6

巻頭グラビア・四郷の四季 8

目次 12

第1部 ブレイクスルー その時、先人は

1 整備期 平成〜令和 14

2 変容期 昭和50年代〜平成 22

3 成長期 戦後〜昭和50年 32

4 黎明期 明治〜戦前 42

第2部 四郷初耳話・四郷ぶらりまち散歩 48

◆ 浦野家旧蔵の「長篠・長久手合戦図屏風」

◆ 浦野酒造に残る板垣退助の書状

◆ 伊能忠敬測量隊が四郷に滞在

◆ 御一新により八王子大明神から八柱神社へ改称

◆ 戦国時代から続く民俗芸能「棒の手」

◆ 四郷ぶらりまち散歩

第3部 年表・資料編 54

取材・編集・写真協力者／参考文献 63

ブレイクスルー

その時、先人は

1 整備期

平成〜令和

2017



2023

「水田」から便利で
住みよい「まち」へ

令和5年(2023)、豊田四郷駅周辺土地区画整理組合(令和5年3月解散認可)が平成27年(2015)から進めてきた土地区画整理事業が約8年間の事業期間で完成した。施行区域は愛知環状鉄道四郷駅の東側に位置する約26ヘクタール。総事業費は88億4900万円(うち53億5000万円は国県市の補助金等)。

四郷駅周辺は市北部の「居住誘導拠点」として鉄道駅を生かしたまちづくりを進める地区となっていた。また、国道419号与茂田交差点付近における慢性的な渋滞も課題であった。これらを解決すべく、土地所有者176名で構成する組合が主体となり土地区画整理事業によるまちづくりを推進。市内初、県内でもほとんど事例のない「一括業務代行方式」を採用し、民間業者が事業運営を支援する態勢を整えた。民間のノウハウを活用したことで工期は当初予定より4年半短縮。地権者の意向に沿った土地活用や四郷駅の高度利用が図られ、水田地帯が快適で便利な「まち」へと生まれ変わった。

R3 造成工事竣工 ● 2021

R4 換地計画認可・換地計画変更認可 換地処分通知 換地処分公告 新町名地番変更 ● 2022

R5 組合解散認可 完成記念式典 事業終了 ● 2023



令和5年(2023)7月、地区の東側より撮影

豊田市の初の一括業務代行方式を採用

令和5年(2023)7月29日、豊田四郷駅周辺土地区画整理組合(令和5年3月解散認可、以下組合)は「豊田都市計画事業豊田四郷駅周辺土地区画整理事業」の完了を記念し、完成式典を開催した。式典には関係者約60人が出席。総事業費88億4900万円、およそ8年に及んだ一大事業の完遂を祝った。この日を万感の思いで迎えた人がある。業務代行者のプロジェクトリーダーとして事業構築・運営を行った岩本光司氏だ。

組合は円滑に事業を進めるため、豊田市では初、県内でも事例の少ない「一括業務代行方式」を採用した。この方式は土地区画整理事業に精通した民間業者が組合の事業、パートナーとなり事業構築や推進を担うもので、同事業では株式会社フジタを代表企業にトヨタさんというライフ、三洋開発、太啓建設の4社が業務

代行者となった。岩本氏はフジタより陣頭指揮を託され、プロジェクトをまとめ上げた。

事業期間を4年半短縮 減歩率を変えず 30億円以上の収支差を改善

プロジェクトリーダーである岩本氏はまず事業計画の再構築に着手した。

「組合設立時の事業収支が不整合であることは想定していました。収支差は15億円程度と見ていましたが、実際に業務代行者となり詳細を詰めていくと、事業収支の不整合は想定より2倍近い額になるとわかりました」。

平成27年(2015)の組合設立時の事業計画は平成23年(2011)の条件下で算出されたものだった。しかし、東日本大震災の復興や東京2020オリンピック・パラリンピック開催に伴うインフラの更新需要等によって建設費は高騰。消費税率も5%で積算されており、支出額は大幅に膨れ上がる見通



式典会場にて喜びの表情を見せる岩本氏

しとなっていた。

「私は事業提案コンペの際、地権者負担である減歩率を変更しないと約束しました。減歩率を上げるとなれば地権者の理解は得られず、事業の推進が困難になります。減歩率を変えずに30億円以上の収支差をいかに改善するかが課題でした」。

設計内容や計画を精査し、費用を圧縮できる箇所はないか徹底的に洗い直した。一括発注で工事の効率化を図るなどして支出を縮減。設計上の工夫を行い、保留地面積を増やす策を練った。変更した計画で事業を進められるよう関係機関と粘り強い交渉を重ねた。また、住みたくなるまちづくりを行うことにより、保留地価格をアップ。組合の収入増も同時に図った。保留地価格の改定にあたっては保留地購入予定企業との協議が難航を極め、事業の一時中断まで頭をよぎったという。

「土地利用計画を大きく見直し、道路面積の削減や地区内の水路を廃止することにより売却可能な保留地面積を増やす、国道敷地内に農業用水路の占用許可を得る、道路位置変更による大口径の上水道本管の移設については経年劣化分に対して市に費用按分をしてもらうなど、あらゆる工夫や説得のための理論構築を行いました」。

大胆かつ柔軟な発想で突破口を開いた岩本氏。すべては魅力的なまちをつくるため、さまざまな提案や粘り強い協議・交渉により、組合員や行政の各関係機関の理解を得て諸課



完成記念碑除幕式にて
左から福岡信明下古屋自治区長、中村竹夫豊田市議会議員、鈴木雅博愛知県議会議員、梅村利幸清算人代表、太田稔彦豊田市長、八木哲也衆議院議員、杉浦弘高豊田市街づくり区画整理協会会長、小井手秀人愛知県豊田加茂建設事務所所長、加藤昭男豊田市都市整備部部長(役職は当時)

H26
業務代行予定者決定・
協定書締結

2014

H27
組合設立認可・
組合設立第1回総会

2015

H28
造成工事起工式
仮換地指定

2016



四郷駅前に立つ高層マンション



業務代行者から提案されたゾーニング計画図



立ち並ぶ商業施設



平成26年(2014)9月16日に行われた業務代行者選定事業提案コンペにてプレゼンする岩本氏

これらの計画変更を実現するには市と都市計画に関する調整が必要であった。しかし、「豊田市駅前の商業施設に影響を及ぼしかねないため、四郷地区には〈近隣商業地域〉の用途地域を設定しないというのが市の基本方針でした」。

〈近隣商業地域〉とは都市計画法で定められた用途地域の一つで、住宅系の用途地域に比べ制限が緩やかで、大型商業施設などの建築が可能となる。

各種データを提示して豊田市と何度も協議を繰り返し、購買力の市外流出を防ぐためにも四郷駅前が〈近隣商業地域〉として都市計画決定されることとなった。

事業が完成し、駅前にはマンションが、商業

組合設立時の土地利用計画は戸建て住宅が中心であった。

「当初の計画は鉄道や国道などの交通利便性などを活かしていきたくない」と判断し、地区の特性に基づいた魅力的で住みやすいまちをつくるために土地利用計画の見直しを行いました」。

四郷駅前に大型街区を配置し駅前にふさわしい高度利用を図るべく、地区の中心部に大型商業施設が立地可能な街区設定を行い、まちとしての賑わいの核となるよう変更した。また、国道419号沿いにはロードサイド型の土地利用が可能となる規模の沿道街区を設けた。

多機能な生活利便施設が
立地し利便性が向上

題の解決を図ったといえよう。

また、豊田市、愛知県からも補助金や公共施設管理者負担金の予算確保等、関係機関協議において力強い支援があった。

組合員、行政、地元選出の代表者、業務代行者が一体となって取り組んできた結果、工期を4年半短縮。収支バランスを確保し、難局を乗り越えたのである。

H17
第7次豊田市
総合計画策定

● 2005

H18
まちづくり勉強会開始

● 2006

H21
準備会設立

● 2009

H22
発起人会結成届・
技術援助申請提出

● 2010

H25
本同意書
9割取得

● 2013

街区にはショッピングセンターが立地している。国道419号沿いには自動車販売店、家電量販店、ドラッグストア、福祉施設などが立ち並び、既存の総合病院、金融機関、郵便局、消防署などとあわせて利便性の高い安心なまちになっている。

地権者の意向を反映した 土地活用

通常の土地区画整理事業は宅地、道路、公園等を整備する事業だが、岩本氏は地権者の土地が有効に活用されてこそ実あるものになると考えた。換地によって農地が宅地になったとしても、土地活用をしないと税負担のみが増えるからだ。行政としても土地の利活用が早期に進めば、めざす都市像の実現が早まる。

地権者を対象に土地活用に関する勉強会を開き、アンケート（平成27年3月実施）で意向を調査したところ「共同で売却する」「共同で賃貸する」との要望が全組合員の4割を占めた。そこで原位置換地（現地換地）ではこれらの意向に答えられないと判断。申し出による集約換地手法を採用する。「申出換地」は同じ利用目的を持つ地権者の土地をまとめて仮

全地権者と面談し将来的な土地活用に関する方針を確認。意向に沿う形で進め、話し合いや説明を積み重ねて理解を得た。

「最善をし尽くしたと言えるプロセスを積み上げて、その上で丁寧に、丁寧に、協議を行いました」。

先人から受け継いだバトン

前述の記念式典では来賓から「全国的にも誇れる市のモデル」などと称賛の声が相次ぎ、35を超える国や地域の公益団体のほか、海外からも視察団が訪れた。

岩本氏は振り返る。

「東京のフジタという会社を代表に民間企業が業務代行者として参画した時点で、地権者は『騙されないぞ』と色眼鏡で見る形になります。常に言われ続けました。『事業が終わればどこかへ行くのだから（信用できない）』と」。

信頼を得るには行動で示すしかない。

「約束を守る、何度でもきちんと説明をする、いただいた意見にしっかり答える、事業を一つひとつ確実に進めていく…行動によって信頼を積み重ねることを意識しました。百数十年に及ぶ先祖代々の土地を預かり、数十億

換地指定を行うもので、今回の区画整理事業において保留地・共同売却街区は駅前マンションや戸建住宅、共同賃貸街区にはホームセンターやスーパーマーケットが建った。

ので、元の土地と離れた場所に換地を設定することもある。換地内容について地権者の納得、理解を得ることが必須となる。

「申出換地」の運用には周到な準備が必要だ。区画整理で通常行われる「原位置換地」（元の土地の付近に換地を定める方法）と異なり、土地活用意向に基づき換地を集約する

「この方法は関係者全員が換地について了承しなければなりません。土地活用に対する事前の十分な説明、緻密な換地設計、地権者の合意形成など、壮大なパズルのピースを一つひとつはめ込んでいくような作業です」。

申出換地計画図



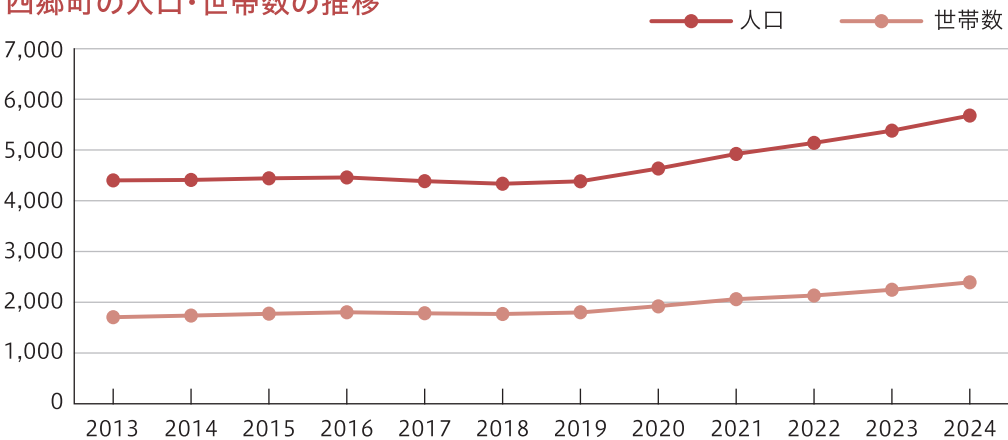
の事業をやっていくわけです。その責任を全うしようとの信念は強く持っていました」。

さらに、こう続けた。

「私はバトンを受け継いだ立場。四郷は発起

人会や地域選出の市議会議員をはじめ地元の高齢者が多く、『井戸を掘った人』がいたからこそ今回の事業が市の上位計画に位置付けられ、事業が立ち上げられました。業務代行方式についても、民間の力を借りた方がうまくいくだろうと地域の見識ある方が後押ししてくれたと聞いています。後世によりよいまちを残したい、四郷を賑わいのあるまちにしたいとの関係者の情熱が形になりました。組合員や周辺地区の方々から『住みやすくなった』『便利になった』と喜んでいただいていることを大変うれしく思います」。

四郷町の人口・世帯数の推移



令和5年（2023）5月、エチオピア連邦民主共和国から都市計画の視察に訪れた一行。右端は岩本氏

ブレイクスルー

その時、先人は

2 変容期

昭和50年代～平成

1976

昭和51年4月26日、岡崎－新豊田間で旅客営業を開始した岡多線



昭和63年1月31日、第三セクター鉄道愛知環状鉄道線、岡崎－新豊田－高蔵寺間が開業

1988

数々の誘致活動と

愛知環状鉄道の開業

「豊田都市計画事業豊田四郷駅周辺土地区画整理事業」以前から、四郷は数々の誘致活動やまちづくりプロジェクトを展開していた。狙いは、新たな土地利用を見据えての「農用地区域」の除外および市街化区域への編入である。四郷地区は旧・猿投町時代に他の地域に先駆けほ場整備事業を実施したが、昭和45年（1970）に「市街化調整区域」、同49年（1974）には「農用地区域」に指定され、他の用途に農地を転用できない状況に陥っていた。

ほ場整備のきっかけとなった旧・国鉄岡多線は、昭和63年（1988）1月31日に営業を開始した県内初の第三セクター鉄道「愛知環状鉄道」に引き継がれた。四郷駅は同日開業。愛知万博の開催や沿線の開発によって利用客は増え、今や通勤・通学に欠かせない地域の足となっている。平成20年（2008）に策定された豊田市都市計画「マスタープラン」では、交通ネットワークを確保しながら豊かな自然環境と都市機能が調和した地域形成を図るとして、四郷駅周辺が「居住誘導拠点」に位置付けられた。

H15 北消防署移転新設 四郷駅前まちづくり計画書提出

2003

H17 愛・地球博開催

2005



昭和51年(1976)、旧・国鉄岡多線旅客営業開業日の様子



岡多線最後の記念乗車券

国鉄による鉄道路線が同45年(1970)、岡崎―北野柵塚間の貨物輸送線として開業。同51年(1976)には岡崎―新豊田間で旅客営業が始まった。しかし、マイカーの急速な普及もあって輸送人員は伸び悩み、同59年(1984)、国鉄は完成間近の新豊田―高蔵寺間を含め、第三セクターによる運営を愛知県と沿線4市(岡崎市、瀬戸市、春日井市、豊田市)に申し入れた。翌60年(1985)、県・4市は第三セクター化受け入れで合意したと発表。新会社を「愛知環状鉄道株式会社」とし、前掲の開業日を迎えたのだった。

四郷地区にとって昭和54年(1979)に開業した西側に位置する名鉄上豊田駅、東側の名鉄猿投駅に加えその中間に四郷駅ができたことで四郷周辺には3つの駅ができ、より行動範囲が広がったといえよう。同62年(1987)には名鉄豊田市駅と愛環新豊田市駅をつなぐベデストリアンデッキが完成し、一層便利になった。



当時を語る福岡氏

四郷が市街化調整区域に組み込まれたのは、大字四郷から四郷町になった昭和45年(1970)のことである。旧・猿投町時代から進められていたほ場整備事業完工後の昭和49年(1974)には、地元で説明もなく「農用地区域」に指定されてしまう。

昭和44年(1969)に制定された「農業振興地域制度」では、都道府県が農業振興を図るべき地域を指定する。その中でも、とくに強化したい地域として市町村によって設定されるのが「農用地区域」だ。いわゆる「優良農地」と呼ばれる「農用地区域」は、農地以外の転用が原則禁止されている。

当時の県営ほ場整備担当者からは「全国どこでも整備が終わればその土地が地域の中心になる」と言われ、それを信じて事業を進めてきた地主たちにとって「農用地区域指定」は予

農振除外に向けた陳情活動

想だにしない事態だった。

四郷の人々は発展的、都市的な土地の利活用が制限されると考え、猛反発。地区役員や地主たちの陳情を受け、当時猿投土地改良区理事長でもあり市議を兼任していた福岡銃二氏は、昭和53年(1978)7月28日に開かれた豊田市農業振興地域整備促進協議会で異議申し立てを行った。会議では市の担当者から「具体的な計画ができた場合は農振地域の除外に向け積極的に対応する」との言質を取るが、現実には土地利用計画が俎上に載ることなく、除外には至らなかった。ここから農用地区域除外へ向けて、四郷地区住民によりさまざまな取り組みが始まる。

県内初の 第三セクター鉄道が運営開始 愛環「四郷駅」が誕生

四郷地域が農振除外に向け活動を続ける中、昭和63年(1988)1月31日、愛知県初の第三セクター鉄道「愛知環状鉄道」(通称・愛環)が岡崎―高蔵寺間(45・3キロ)で運営を開始し、四郷駅が誕生する。当初は無人駅だったため、豊田市は待合室や便所の清掃管理、駐輪場の整理を地元の高齢者クラブに要

請。その頃、下古屋松栄会の会長であった浦野光春氏は「私たちで役に立てれば」と快諾し、「やっぱりだめか、もうだめかと、何度も思った鉄道がやっと通る。みんなに喜んでもらえる駅にせんといかん。赤字が続いてダイヤが半分にされたりでもしたら大変だ。大事な鉄道をみんなで何としても守っていきたい気持ちです」と新聞の取材に答えている。

愛環の前身は、ほ場整備事業のきっかけとなった岡多線だ。岡崎と多治見を結ぶ線路の敷設には莫大な費用がかかる。当時、周辺には大きな産業もなく輸送量も見込めなかったことから、鉄道省は前段階として昭和5年(1930)、日本初の省営バスを走らせた。旧・

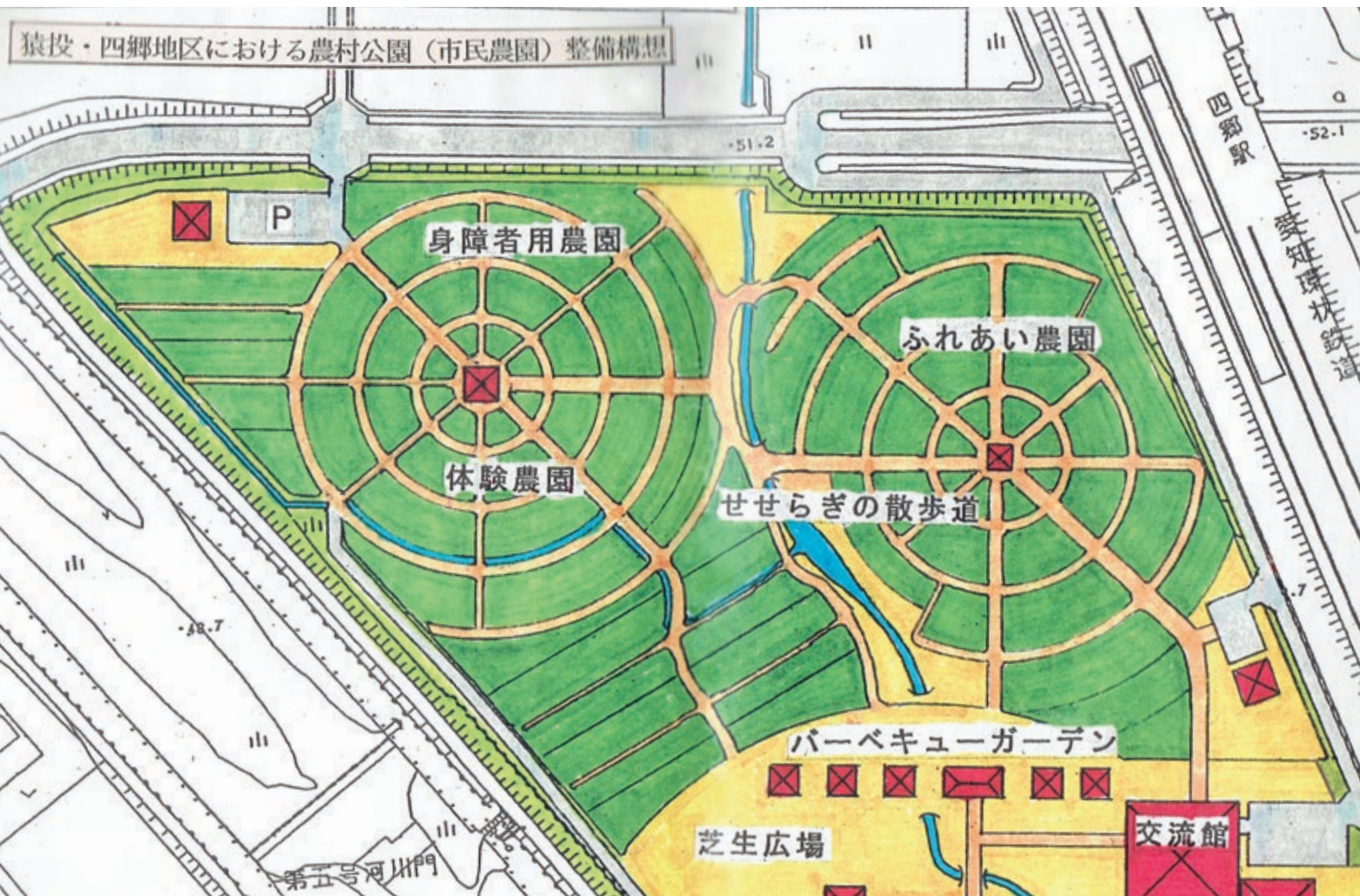


昭和63年(1988)、四郷駅開業日の様子

H5
花本産業団地
造成始まる ● 1993

H5
猿投農協が
豊田農協と合併 ● 1993

H10
猿投地区まちづくり
協議会発足 ● 1998



四郷駅西側の土地を生かして都市型農村公園の整備を構想した計画図の一部



四郷駅西側が農村公園予定地となっていた

者がただ反対するだけで頭きちゃってね」。

話をしても埒が明かないとみた福岡氏は「本庁へ行こまい」と息巻いたものの、浦野氏から「法律で決まっとるもんはしょうがない」と止められる。他に方法がないか、「農用地区域」を除外できない理由は何かよくよく調べると、「農用地区域」を除外できないのは猿投カントリーエレベーターが立っているのも理由の一つだとわかってきた。

「豊田の農協が合併する前、猿投農協のところに粗摺り機があった。それが壊れそうだった。猿投農協がね、県に施設を作り直したいと申し込んでもダメだと蹴られたらしく、組合長が困って私のところに来た。そこで、私が働きかけたら予算が取れてカントリーエレベーターができた。そしたら今度はね、

万博の中継駅として 連日混雑

愛環、四郷駅にとって大きな転機となったのは平成17年（2005）の愛知万博「愛・地球博」の開催である。愛知万博では環境への負荷を最小限に抑えるため公共交通機関の積極的な利用が推奨され、愛環は会場（長久手・瀬戸）への主要なアクセス交通機関としての役割を担った。貝津駅、保見駅、篠原駅と共に会場への中継駅となった四郷駅は駐車スペースが広がったこともあり、3月25日から9月25日までの期間中は連日混雑した。また、同年3月に東海環状自動車道東回り区間・豊田東JCTー美濃関JCTが開通。時を同じくして愛知高速交通株式会社（リニモ）が開業したことも影響したのか、マレットゴルフ場の駐車場を臨時駐車場として開放しても足りず、駅周辺の農道が車で埋まる状況だった。

四郷駅前が県勤労福祉会館 移転先候補に

愛知万博から遡ること十数年、四郷駅周辺に開発計画が持ち上がった。

平成4年（1992）、福岡氏のもとに愛知

県勤労福祉会館移転の話が舞い込む。「四郷駅前を県勤労福祉会館の建設予定地にしたい。ついでに地主の同意を取ってもらいたい」と、当時の豊田市長・加藤正一氏から直々に依頼があったのだ。その前年度、愛知県は当初予算に勤労福祉施設改築調査費を計上しており、県と市、二者による複合的な施設の建設を企図していた。この計画が採択されれば、農用地区域除外の足掛かりになるかもしれないと、福岡氏をはじめ下古屋、天道、上原、井上、高町の地区役員たちは地主36人分を取りまとめ、四郷駅前の1万2000坪を確保する。さらに福岡氏は子どもから定年を迎えた大

人たち、そして農業者との交流の場として体験農園やバーベキューガーデン、芝生広場、体験実習館等を備えた都市型農村公園を一体的に整備しようとドイツに赴いた際、施設を見学している。

ところが、またしても県から「待った」がかかる。「農用地区域」に指定されているため、県勤労福祉施設は建てられないというのだ。

「代議士の浦野さん、天道と下古屋の区長さんと一緒に県事務所へ行ったらね。所長が『ここは税金かけて作った優良農地だ。勤労福祉会館を建てることはならん』と言うだけだね、今までの経過も実情も何も知らない担当



第三セクターでの運営を伝える当時の新聞記事

S63 1988

愛知環状鉄道開業 四郷駅開設
猿投カントリーエレベーターが完成



花本産業団地



愛知県勤労福祉会館移転に関する要望をまとめた書類
趣意書に始まり、地区計画資料、四郷駅前開発の経緯や移転新築に関
する要望書、議事録、地権者名簿など100ページ近い資料がまとめられ
ている。左は福祉会館移転要望書区长署名の控え

これだけの施設を作っちゃったもので、『農用
地区域を外せん』と言ってきたんだ。
福岡氏は「なんで最初に教えてくれなかつ
たんだ」と抗議。その後やり取りを重ねる中で
農協の合併話が浮上する。「合併して豊田市
全体の施設になれば解除ができると教えてく
れる人がいて、なんとか打開できた」。

こうして猿投農協が豊田農協に統合され
ることで道筋が見えてきたと思われたが、県
勤労福祉会館移転案件は遅々として進まな



猿投カントリーエレベーター

かった。そこで四郷地区は署名活動を展開。平
成9年（1997）には21地区長および
8175名分の署名を添えて市に要望書を
提出し、市北部住民の総意として県関係者へ
の働きかけを訴える。その後、同案件は議会に
提出されたが、時を重ね、勤労福祉会館の利
用者の減少や、存在意義そのものが問われる
時代へと移り変わってきたことから、案自体
が立ち消えとなっていた。

計画を進めていた都市型農村公園について
は、地主の同意がまとまり始めると「定年退
職を迎えた人が野菜づくりを楽しめる施設
に」と市から依頼があり、農村公園ではなく
豊田市初の「農ライフ創生センター」として平

成16年（2004）に開設され、市とあいち豊
田農業協同組合が運営している。

企業誘致と花本産業団地の 造成

福岡氏は加藤正一市長（6代目）時代、市か
らの要望を受け花本産業団地の造成にも尽
力している。

「梅坪が駅前の区画整理をするので、当時
あった旭硝子（現・AGC株式会社）を移転さ
せたいという話だった」。

旭硝子は輸出入を考え梅坪の南側を要望し
ていたが豊田市が土地を確保できず、「猿投で

作ってほしい」との要請があったという。工業団
地の造成によって、女性が子育てをしながら近
隣で働ける環境も確保でき、雇用が生まれれば
四郷周辺の人の流れが活発になる。四郷駅前開
発実現の機運を高めるきっかけにもつながる
と考えた福岡氏は地主の取りまとめに動く。

「あそこは水が湧くから深いところがある
沼田だ。戦後の食糧難で作ったたし、ほ場整
備でようになったけど、地元の人たちはやら
ない土地だった。田んぼを兼業でやっておった
人たちが定年になって、継がせるにも息子た
ちは勤め人だし、米は作っても赤字になるよ
うな時代で売っちゃえばいいという感じだっ
た。私は造成から換地から何からやって、一か
ら十までよう知ってるでね。ここならまとま
ると思った。みんな判を押してくれた」。

結果的に旭硝子は入らなかったが、他の企
業が進出した。

国道419号（県道豊田多 治見線バイパス）の整備

昭和40年代に入ると下古屋から天道を抜け
る県道豊田多治見線は自動車の通行量が増え、
拡幅を伴う改良整備が必要となった。しかし、
四郷の辻に天道と亀首境の三差路に至る道路



農ライフ創生センター

S51
岡多線岡崎—新豊田で
旅客営業開始 ● **1976**

S53
四郷地区の農用地区域
除外に向け異議申し立て ● **1978**



渋滞を緩和し防災ネットワークの強化を図るため4車線化が進められている国道419号。
写真左上・右上令和6年(2024)、左下平成29年(2017)、右下平成27年(2015)

の両側には家屋が密集しており、道幅を広げ
ることは難しい。そこで愛知県土木事務所よ
り提案されたのがバイパスの建設である。
計画はすぐ関係地区にもたらされ、昭和43
年(1968)6月に説明会が開かれた。この時
点では舞木交差点から上原橋(上原町)の間に
幅員13メートルのバイパス道路を建設し、道路
整備を図るものであった。その後、地元市議や
土地改良区役員によって道路建設推進委員会
が設置され、同年11月の会議でバイパス延長は
舞木から四郷までの2500メートル(2・5
キロ)・幅員8〜12メートルで、同年度中に測量
を開始し、用地買収を先行して進めることが決
定された。
四郷地区においては県営四郷住宅西側のほ
ろ整備地区外は46年度(1971)中に、施工
済の地区内は47年度(1972)中に用地買
収が完了した。
旧・猿投町北部工区のほろ整備事業と並行
して進められたバイパス工事は昭和47年度に
完工した。総事業費は2億2500万円。供
用開始は昭和47年11月12日で、猿投グリー
ンロードより7カ月ほど後となった。工事完了
から10年後の昭和57年(1982)4月1日
に国道419号に昇格。平成29年(2017)
には4車線化が計画され、東海環状高速道路

と共に豊田市北部と岐阜県土岐市、多治見市
方面をつなぐ重要な道路の一つとなった。
**事業化への足掛かりとなる
合意形成**
昭和50年(1975)以降、平成にかけては
四郷にとって交通インフラが整い、駅前の農用
地区域除外に向けたまちづくり構想が浮かん
では消えた時代であった。前述の県勤労福祉会
館以外に、総合小売業ユニーの誘致が計画され
たこともある。土地活用については地主の意向
調査も行い、住民説明会も開いて誘致に関する
同意も得てきた。ユニー誘致は豊田市駅前の商
業施設への影響を考え白紙になったが、四郷の
人々は案が出される度に事業実現化に向け住
民らが一致団結し、合意形成を図って政策で訴
えてきた。この頃から農用地区域除外に向けて、
行政側の風向きが変わってきたと福岡氏は言
う。
強いリーダーシップを発揮しまちづくりを
牽引してきた福岡氏は「行政を動かすには、同
意を取ることが絶対」と断言する。その上で、
「人間ちゅうのはね、対話だ。いろんなこと
言っとるけれど、直接会って話すとわかって
くれる。もう一つはね、いろいろな事例を知っ

とらなあかん。私は今まで体験しとるもんで
『こついうときはこつなるよ』と相手の言うこ
とに對し何でも答えられる。それで伝わるだ
よね。福岡さん、おまえに任せるでねとなる。
しょうがないわと言っていた人でも、後になっ
て、おまんがやってくれてよかったってなるで
よ」と合意形成の極意を語る。
平成18年(2006)、有志によるまちづく
り勉強会が始まり、翌19年(2007)に「豊
田都市計画事業豊田四郷駅周辺土地地区画整
理事業」への足掛かりとなる85%の仮同意書
が集まる。そして、同21年(2009)には三
矢宣昭氏を会長として、四郷駅周辺土地地区画
整理事業の準備会を立ち上げ、翌22年
(2010)に発起人会に移行。同25年
(2013)に本同意書90%を取得。そして同
26年(2014)、地元の念願が叶い、四郷駅
前1帯は市街化区域に編入(農用地区域除外)
され、都市計画が決定した。
『「全国どこへ行っても、土地改良事業で田
園整備をしたところは地域が発展する」との
県の人の言葉を信じ、やってきた」と述懐する
福岡氏。次章ではまちづくりの基盤となったほ
ろ整備事業について詳しく見ていく。



ふくおか せんじ
福岡 銑二 氏

昭和5年(1930)生まれ

農業に従事する傍ら豊田市議会議員32年(8期)、猿投
土地改良区理事長ほか、猿投農業協同組合理事・豊田土
地改良区理事・あいち豊田農業協同組合理事・豊田市ア
パート協同組合理事長・愛知県中小企業団体中央会理
事・愛知県土地改良事業団体連合会理事・豊田市防火危
険物安全協会会長などを歴任

黄綬褒章、旭日小綬章を受章、市政功労賞など受賞

ブレイクスルー

その時、先人は

3 成長期

戦後、昭和50年

ほ場整備に始まった
まちづくり

旧・猿投町の中心地であった四郷地区。昭和30年（1955）頃の田畑は形がいびつな上、狭小で農道も整備されておらず、低い生産性に甘んじている状況であった。時代は高度経済成長期。工業をはじめとする他産業との所得格差が広がり、農業の近代化・機械化に向けた基盤整備の必要性が強く叫ばれるようになる。そうした中、地域住民の念だった国鉄岡多線の線路建設計画が持ち上がり、線路によって四郷の水田地帯が分断される懸念が生じた。そこで、最適な農地の活用と農業経営の合理化・安定化を図るため、四郷を含む旧・猿投町は県営ほ場整備事業を決意。昭和40年度（1965）に着工し、岡多線、猿投グリーンロード等の関連事業と合わせ、昭和47年（1972）7月に面積502ヘクタールを完成させる。その直後、7月12日から13日にかけて西三河一帯を襲った集中豪雨により籠川の氾濫、枝下用水の決壊と大災害を被ったが、災害復旧工事を1年余りで完了し、およそ8年にわたった全事業を完成させた。

ほ上整備前の南部工区の様子。大小さまざまな形の田が広がる



ほ場整備後、南部工区周辺の空撮。入り組んだ田が整然と整備された

ほ場整備のきっかけは 岡多線建設計画

農業地帯580・5ヘクタールを対象に、総事業費約8億6000万円をかけた旧・猿投地区の県営ほ場整備事業は昭和49年（1974）3月26日の北部工区換地会議でもって全事業を完了した。

昭和40年（1965）12月の着工以来、8年余りに及ぶ壮大な事業であったほ場整備事業の発端は、地元住民の数十年にわたる悲願であった岡崎・多治見を結ぶ岡多線（現・愛知環状鉄道）が昭和34年（1959）、工事線に採択されたことに始まる。



国鉄岡多線の建設（豊田市・昭和49年）

鉄道の敷設は地域開発の意味合いが強く、岡崎市をはじめとする沿線市町村は大正10年（1921）頃より陳情活動を繰り返していた。昭和2年（1927）に「愛知県岡崎ヨリ拳母ヲ経テ岐阜県多治見ニ至ル鉄道」として予定鉄道路線に追加され、同10年（1935）に線路建設が決まったものの、戦争で中断。時は流れ、同32年（1957）の鉄道建設審議会と同線が調査線に、同34年（1959）に工事線、同39年（1964）に「国鉄新線」の一つに規定される。

しかし、同線が敷設されると四郷の水田地帯が分断され、土地利用や農作業に支障を来す。当時、下古屋区長であった磯村貴一氏は近所に住んでいた浦野幸男代議士から岡多線の計画を聞き、自宅に下宿していた加藤光男氏に相談。加藤氏は豊田農地開発事務所に勤務し、ほ場整備の仕事をしていたという。加藤氏の助言もあり、磯村氏は天道、下古屋、上原、井上の自治区役員と話し合いを重ね、四郷区域だけでもほ場整備をやるようになった。これを聞いた豊田農地開発事務所の天池正所長が規模を大きくして県営事業としてやってはどうかと提案。磯村氏たちが螺澤利三郎猿投町長に伝えると、螺澤町長は熟慮の末、四郷のみならず町全域でやると決断し、猿投町始

まって以来の一大事業、愛知県第2号の県営ほ場整備事業として動き出すことになる。

国を挙げ、農業の近代化・大型化を図る

ほ場整備事業の背景には、農業を取り巻く状況と国の動きもあった。

昭和30年代の高度経済成長期、若年労働力の流出や農業・工業間の所得格差が広がり、「農業の曲がり角」という言葉がさやかれるようになった。そこで国は農業生産性の向上と農家所得の増大を目的に昭和36年（1961）、「農業基本法」を制定。大規模化や機械化を推し進め、自立経営農家の育成を図る。

猿投地域においても同様に農業人口が他産業へ流れ、所得も自動車関連企業で働く人たちより低いと嘆く状況であった。大型農用機械の使用もほとんど見られなかった。

猿投土地改良区を設立 昭和40年度に着工

ほ場整備事業に難色を示す農家も多い中、区長や町職員、推進委員は同意を得るため日



猿投土地改良区設立認可申請書
（昭和40年8月）

猿投土地改良区設立発起人41名には四郷出身の渡辺武、磯村貴一、吉田鉄二、吉田初夫、今井一郎、鈴木彦五郎、福岡鉄二、篠沢亮幸、大橋景之助、山田正則が名を連ねる。



県営ほ場整備事業の実施を伝える「広報猿投」
（昭和40年6月10日第48号）



四郷町周辺のほ場整備前の地図（手書き）
土地の大きさも形もさまざま。地権者も多く、土地が入り組んでいることがわかる

旧猿投町におけるほ場整備前と後での農用機械数

区分	耕うん機・トラクター		動力噴霧機		動力散粉機		農用トラック	
	農家数	台数	農家数	台数	農家数	台数	農家数	台数
昭和40年	404	409	1104	1104	97	97	783	799
昭和50年	6154	7831	1902	1912	1656	1659	2101	2175

出典：『猿投土地改良区25年の歩み』



ほ場整備前(上)と後(下)の南部工区



夜奔走。最終的に総数の92・5%の同意を取り付ける。昭和40年(1965)12月22日付で猿投土地改良区設立の認可を愛知県知事より受領。同年度事業として着手し、翌年1月26日に猿投町役場において猿投土地改良区設立総会が開催された。

ようやく施工に漕ぎつけたものの、前例のない事業であったため前途多難であった。猿投土地改良区設立発起人の一人で、理事、事務長、初代螺澤理事長の後を継ぎ2代目理事長として同事業を率いた福岡銃二氏は当時を振り返る。

〳〵人情と絆〳〵が 整備事業の推進力に

「この辺りには整地のできる業者がなかつ

た。ほいだで、北海道から湿地ブルを何台か持ってきてやった。大手の業者が2つか3つ入ってきたけど、みんな損こいちゃってね。ほれは、地形を知らんもんでね。名古屋の方は堆積土だもんで土の層が決まっとるだよ。いくら削っても米の取れる土や砂が出てくる。だけど、ここらは一枚一枚土の質が違う。田の表土をもってきて5年もすると沈下して土地に高いところや低いところが出て湧水が出るでね。ひどいと石を持っていって苗を立てておく有様だった。ブルが来てもはまっちゃってね。矢作建設だけが地元だもんで、赤字でも辛抱して残ってくれたんだ」。

礫が出れば人海戦術で取り除き、耕うん機が埋まれば役員みんなで引き上げた。

矢作建設は『猿投土地改良区25年の歩み』で「この工事で忘れることができないのは、福岡現理事長をはじめとする改良区の皆様のご助力でありました。なかでも、我々の内情や取組み姿勢を深くご理解下さった理事長が、作業員宿舎として納屋や土地を無償で貸与下さったことであります」と記している。

畑で採れたスイカやダイコンを持たせたり、熱を出した県の職員に温かい握り飯を食べさせ、介抱したこともあったと話す福岡氏。「お祭りになると県の人も市の人も『おまんとこ

行くぞ』と言ってね。その時分は今のようなことはないもんで、みんな家に来て、『手酌だぞ』ってやっておっただよ。県の人も一生懸命やってくれたしね。ほいだで、私は『猿投会』というのを作っけ。何十年とやってきただよ。うちのおふくろが『人のために尽くさなアカン』という人だったからね」。

不首尾に終わった コンピュータでの換地

ほ場整備事業は当初、工事を先行。整地が完了したところから換地作業に入った。感情を交えずやれるということで県から換地の組み合わせにはコンピュータ(当時は電子計算機と呼んでいた)を使うよう指示があり、うまくいくのか半信半疑ながらも労力的に助かるなら、と取り入れることになったという。ところが、不安は的中。プログラムが東北地方の換地をモデルに組まれており、基準となる「条件」がそもそも違っていたと福岡氏は話す。

「ここらはみんな道路沿いの田んぼがよいと。東北の方は通り沿いだと電線に鳥が来て、鳥害があるからそういうところはやめたい。水もあつちは用水でやっけるとるけど、ここらは川から直接引いとるでね」。

S45
大字四郷から四郷町へ
市街化調整区域に編入 ● 1970



猿投グリーンロードの開通を祝う市民たち

S47
猿投グリーンロード開通
47年7月豪雨災害 ● 1972

猿投グリーンロードの用地不足を
北部の換地計画で補正

こうした事情をプログラム担当者に説明しに福岡氏と豊田農地開発事務所の総務課換地係長であった池田欣一氏は東京まで足を運んだが、ようやくでき上がった換地計画書を点検すると集団化が強く図られたため小さい面積の人が遠くへ飛ばされたり、コード記入ミスによる手違いがあったりした。そこで福岡氏が取った策は——「大方手直ししちゃった。ほいで、コンピューターでやったといつて発表しちゃった（笑）」。

「はじめは、整地や換地に不満を言われて『土地改悪』と言われたこともあった。ほいで、もね、土が良くなった田んぼもあるもんで、結果的には全体的によく米が取れちゃった。それで、『土地改良をしてよかった』と言われて全て解決したよ」。

整備事業最終年度に発生した
昭和47年7月豪雨災害

昭和47年度はほ場整備事業の最終年度で
猿投グリーンロードは名古屋市中央部より東名高速道路名古屋インターチェンジを経て豊田市北部を東西に横断し、三河山間部へ直結する道路として計画された有料道路である。農山村の過疎化解消や地域社会の産業発展、住民生活の福祉の向上といった期待がかけられ、建設計画が発表されたのは昭和43年（1968）1月。工事は同年5月に始まり、豊田市力石町を起点、愛知郡長久手町（現・長久手市）を終点とする延長1万4225メートル、全幅11メートルの規模で同47年（1972）3月に完了した。ほ場整備事業は道路南側を昭和45年度、同47年度に、北側を同46年度に施工したため道路の法面先に高低差が生じ、その部分の用地の過不足は北部工区の換地計画によって補正した。



甚大な被害をもたらした47・7豪雨（豊田市錦町）

同年7月12日、西三河一帯を集中豪雨が襲う。猿投ではこの日の9時から翌日9時までに309ミリの降雨を記録。土砂崩れや河川の氾濫が相次ぎ、豊田市で9名、小原村で32名、藤岡村で22名、足助村で4名と67名もの死者を出す大惨事となった。

ほ場整備事業はほぼ工事が完了し換地処分を急いでいた時期だったが、籠川が現在の内浜化成株式会社（当時の内浜工業株式会社）裏の堤防と上原町上原橋上流100メートルの2カ所で、枝下用水が花本町地内で決壊。農地に濁流が流れ込み、辺り一面水につかる状態であった。排水路は水が溢れ、整備した畦道は全域にわたり崩壊した。

福岡氏はこの日のことを鮮明に覚えているという。

「私が議員になって2年目だ。夜ね、井上というところに水神池ちゅう池があつて、『水神池が満杯で決壊しちゃうとえらいことになる』と私のところに電話があつた。国道419号に消防署の出張所があつたもんで、そこへ寄つて、消防員を連れていこうと思つて行つたらね。一人留守番がおるだけでみんな出ちゃつてた。しょうがないもんでハンマー借りてね、猿投駅へ行こうと思つたらどえりやあ雨でね。車の窓開けて首出して前を見な進めへん。水神池のブロックを破つて水を放流して決壊を防いだんだけどね。雨でこんなふうになるとは夢にも思わなかった。怖かったよ。枝下用水が逆流しとつてね。プロパンがぷかぷか浮いて流れておつた。うちの隣に駐車場



S34 伊勢湾台風 ● 1959 S39 岡多線が工事線に採択 ● 1964 S40 猿投土地改良区設立認可 県営ほ場整備事業工事着手 ● 1965



ほ場整備事業における47・7豪雨災害復旧工事は1年ほどで完工した(写真は豊田市勘八町地内国道153号)

S42 猿投町が豊田市に編入 ● 1967



昭和34年(1959)に発生した伊勢湾台風での被害の様子(挙母神社)

があるだら。井上から回って、あそこで車の向きを変えようと思って西を見たら、籠川が切れて、県道が川になった。ほいだから、私はその後、この地域の排水をどういう形で整備すればいいかわかっただ」。

猿投土地改良区は豪雨による被害を受け、補助金を申請。昭和47年度(1972)末までに復旧工事を完了させ、同48年度(1973)の水稲作付けに間に合わせた。この災害を教訓に、ほ場整備事業の設計基準は排水路計画を中心に置くようになった。

みんなで知恵を補い合って
100%にする

8年余りに及んだほ場整備事業は昭和45年度(1970)に南部、同48年度(1973)に西部、北部で換地会議が行われ、全事業を完了した。最初こそ苦情や反対の声が寄せられたが、「ほ場を整備したらどこも思ったより米が多く穫れて、全部解決した」と福岡氏は述懐する。

「いちばん助かったのは、ブル入れて田んぼの土をいじくるだ。ほいだら、それまでザル田であったのがブルの重みで床がでぎちゃった。田んぼの水の持ちがどえりゃあよくなつて、1週間くらい持つようになった。ほれだもんで、矢作ダムから水をもらおうと頼んであったんだけど地元の人が必要ないということに

なり、誰も農林省に行く人がおらんもんで、私が行っただ。事情を説明したら『ほ場整備をやって水が要らなくなったのはおまんこだけだがや』と言われた」。

まちづくりの土台となった一大事業をどのように成功に導いたのか。福岡氏は言う。

「全身全霊をかけてやった。私が思うに、人間は100%じゃあかん。70%以下だと『あいつはダメだ』となるけど、ちいと補ってやれば100%になるとなりやあ、みんなが助けしてくれるで。私の性格はそういうこと。みんなで知恵を補って100%にするということだけは心得とるでね。ほいだもんで、何をやっても全部まとまっちゃうだ(笑)」。

コラム

豪雨の土砂崩れで遺跡が発見される

昭和47年(1972)7月豪雨で発生した土砂崩れにより、伊保川と籠川の合流点に近い丘陵(四郷町西山)で欠山式の土器片が見つかった。パレススタイルの壺をはじめ、約30点の遺物の多くは弥生時代終末期のものと考えられている。

伊保遺跡および神郷下遺跡もほ場整備事業によって発見されたもので、猿投遺跡調査会が昭和44年(1969)と45年(1970)の2回にわたり発掘調査を行った。その結果、猿投地域には多くの遺跡が埋まっていることが判明し、後世に郷土の歴史を伝えるべく福岡氏を発起人とする有志が『猿投の遺跡』を刊行している。



左:故 山田正則氏開墾中に出土した遺物(福岡銃二氏所有)



ブレイクスルー

その時、先人は

4 黎明期

明治～戦前

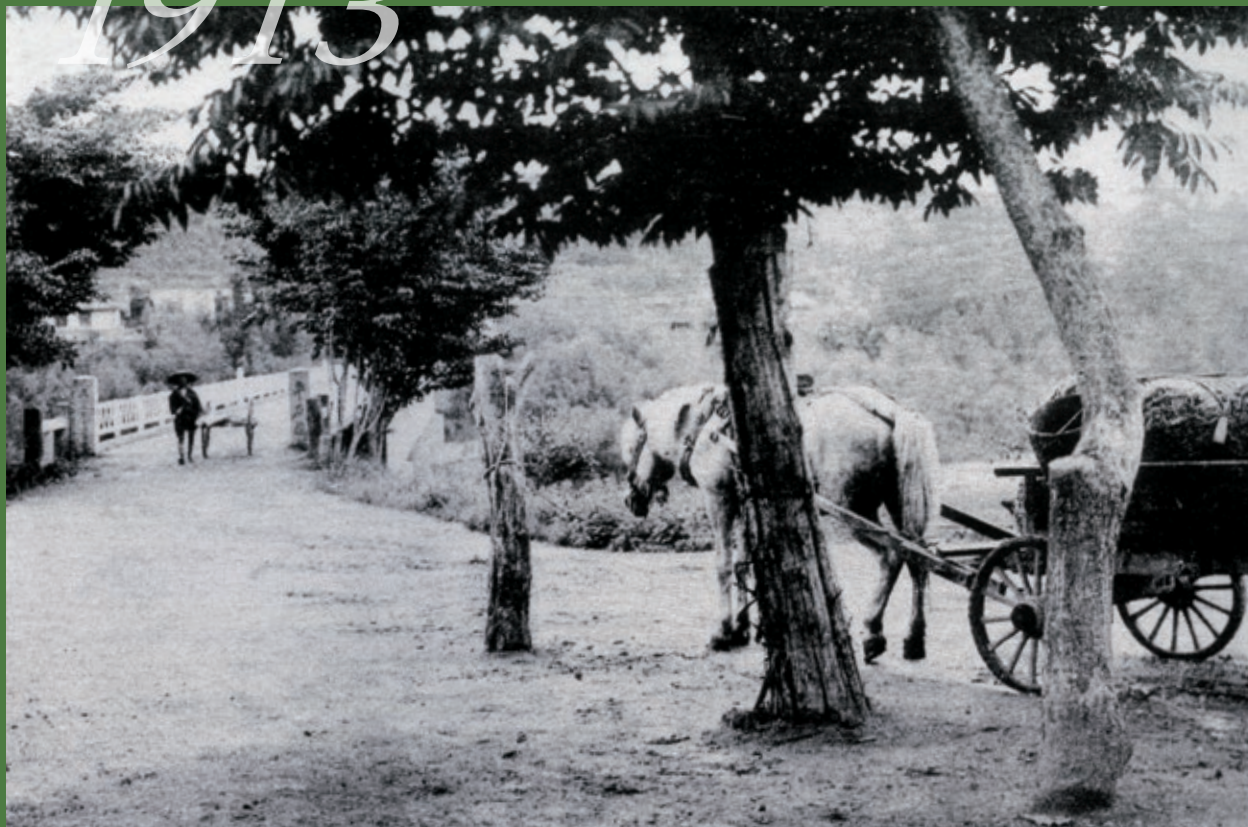
原野から農場、
馬車から
自動車、鉄道へ

江戸時代、拳母藩四郷村であった四郷は明治22年（1889）、市制町村制の施行により花本、越戸、荒井、御船の村々と合併し、上郷村大字四郷となる。明治39年（1906）、上郷村と広沢村、富貴下村が合併して猿投村になると村役場が四郷に設置され、役場に通じる道路が拡幅されるなど行政の中心地として存在感を増していった。

明治43年（1910）、名古屋の実業家・井上徳三郎が猿投村大字四郷字東山の青木原帯（現在の井上町・青木町）を買い受け、開墾事業を始めたことで四郷の集落は広がっていく。

当時、人の往来や物資の運搬は人力車や荷馬車に頼っていたが、明治の終わりから大正初めにかけて鉄道・自動車が走るようになる。井上農場においても規模が拡大するにつれ大量の輸送需要が発生し、井上徳三郎は三河鉄道の敷設・延伸に奔走した。猿投村の村長であった四郷下古屋の浦野謙朗はT型フォードを共同で購入。これがバスの始まりとなり、その後、愛知県初の乗合自動車として路線を拡張していった。

1913



1916

T3
尾三自動車誕生 ● 1914

S5
国鉄バス(省営バス)の
路線開通 ● 1930

S7
三河鉄道猿投駅
新築 ● 1932

S20
終戦 ● 1945

S28
猿投村から
猿投町へ ● 1953



旧井上家住宅西洋館
井上農場住宅の迎賓館として使われていた。現在は豊田市民芸館敷地内に移築されている。



井上徳三郎が改築した猿投駅



「株が上がる」に通じるとして作られたといわれるカブの形をした窓枠。



愛知県立猿投農林学校 大正12年(1923)井上地区

ブームもあり、井上徳三郎は三河鉄道(現・名古屋鉄道)の敷設、延伸に尽力する。大正13年(1924)には多額の私財を投じ猿投駅の駅舎や建設用地として6000坪を寄付。昭和7年(1932)には駅舎の改築資金も提供している。井上徳三郎は社会事業にも多大な功績を残しており、愛知県立猿投農林高等学校(移転時は「西加茂郡立農学校」)が移転する際は井上農場の土地7000坪を県に寄付している。これらの偉業を称え、大正14年(1925)に村民が井上眞冽翁頌徳之碑(いのうえしんれつおうえんとくひのひ)を建立。昭和11年(1936)には大字四郷字東山を字井上に改称した。



井上徳三郎
慶応3年(1867)
名古屋(中区)に
生まれる。
69歳で没。

古くから開けた集落であった四郷に転機が訪れたのは、名古屋の実業家・井上徳三郎が現在の井上町、青木町にあたる青木原一帯を開拓したことに始まる。

両替商を営んでいた井上徳三郎は日露戦争時の好景気の波に乗って多くの事業を手掛け、巨万の富を得た。明治44年(1911)、岐阜の久米八郎から四郷の東部一帯130町歩ほどを買収すると、大正元年(1912)に井上農場を創設。松林と樹木に覆われた原野を耕作地へと開墾した。入植農家3戸20人だったのが、経営25年目の昭和11年(1936)

実業家・井上徳三郎が
青木原一帯を開墾



井上農場に入植した人々

には60戸余り、人口300余人に達したと記録に残る。

井上農場は現在猿投の特産品となっている柿をはじめ、茶、大根、人参などを生産し、畜産にも注力した。最も多く栽培されたのは

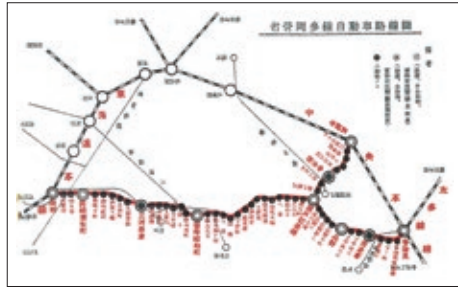
桑である。もとより、豊田市の前身である挙母町は養蚕・製糸業が盛んで、「三河地方有数のマユの集散地」として名を馳せていた。背景には明治6年(1873)に制定された地租改正条例がある。米に代わり地価の3%を貨幣で納めることになったため、現金収入が得られる商品作物が普及。とくに養蚕は米に次ぐ収入となり、天道、下古屋、上原地区でも桑畑が増加した。猿投村史によると明治40年(1907)には510戸ほどの農家が養蚕を行い、養蚕の組織団体「猿投公栄社」があった。桑畑は猿投村全体で166反(16町6反)に及び、春蚕、夏蚕、秋蚕を飼育していたという。四郷においても雲龍寺を会場に養蚕科目の学習会が行われた。また、桃や梨、栗、なたね、たばこ、ごま、らっかせいが作られていたと昭和4年(1929)の猿投村勢一覧に記載されている。

大正13年に猿投駅が開業

井上農場の規模が拡大するに従い、大量輸送の必要性が高まっていく。また、四郷周辺における生業の一つであった松、なら、あべまぎ等の割木、耐火用粘土を瀬戸へ運搬する需要もあった。日清・日露戦争後の私設鉄道建設

M4
● 1871

廃藩置県により拳母畔四郷村から
拳母県加茂郡四郷村に



省宮岡多線自動車路線図
(昭和5年[1930]12月20日)



開業当時の省営バス

M22
村とともに ● 1889
郡区となる

隣接する4カ村とともに
上郷村四郷区となる

[illegible]

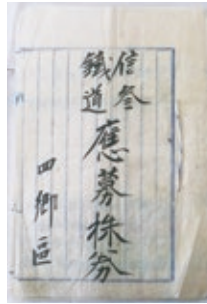
省営自動車岡多線賃金表

野謙朗 本多松三郎、大岩安五郎、宮川幾太郎、宇佐美一夫の5名。翌3年（1914）には「尾三自動車株式会社」と組織化し、初代社長に本多松三郎氏が就任した。

この車が愛知県で最初の本格的な乗合自動車（バス）だといわれている。尾三自動車（株）は西三河北部一帯に路線網を拡大し、昭和5年（1930）9月には営業許可24路線、総延長距離約720キロ、運転車両36台を擁する県内最大、全国有数のバス会社に成長する。その後、昭和12年（1937）に尾三自動車は名古屋鉄道の傘下に入り、同18年

M23
枝下用水完成 ● *1890*

枝下用水完成



信参鉄道応募株券
当時の四郷地区有力者の名前
と出資金が記されている。計
画は頓挫したが、当時の人々
がいかに関心を持っていたか
がわかる資料

近代化をめざす明治政府は鉄道建設を強力に推し進めた。私設鉄道も多数存在し、豊田市域で明治期に計画された鉄道は9つに上る。四郷に関わるのは旧拳母藩12代当主・

信参鉄道の誘致活動

開墾景氣に沸いた四郷であったが、昭和4年（1929）、アメリカに端を発した世界恐慌の影が忍び寄る。翌5年（1930）3月には商品市場が大暴落。マユの価格が1年間で半値となり、養蚕業は壊滅的な打撃を受ける。昭和16年（1941）の太平洋戦争勃発によって桑園は主食作物畑に切り替わり、戦後は生糸に代わるナイロン繊維の普及で養蚕は衰退の一途をたどった。昭和29年（1954）には猿投村における桑園面積は明治末期の6分の1となり、現在、当地で桑畑を見ることはなくなった。



平戸橋西詰にあった尾三自動車本社(左の洋館)とバス



小原村に停車中の尾三バス

内藤政共らが發起人となり明治33年(1900)9月に出願された信参鉄道(株)で、四郷区保有の資料「信参鐵道應募株券」には「五株杉浦谷次郎 壹株杉浦勘七」と鐵道建設に賛同した115人の名が記されている。信参鉄道(株)は愛知県碧南郡新川町(現・碧南市)から安城、挙母、足助を経て長野(県飯田、松本)へ抜ける計画で明治40年(1907)11月、工事に着手したが完成を見ることはなく、大正5年(1916)に解散した。

愛知県初のバスは浦野謙朗が購入したT型フォード

家業の酒造業を継いだ下古屋の浦野謙朗は父の錠平と同様に猿投村の村長、衆議院議員として国政でも活躍した人物である。浦野謙朗は明治天皇の大喪の礼に参列するため東京に向いた際、自動車に乗って東京見物をした。その速さと便利さに着目した浦野謙朗は帰郷後に共同で中古のＴ型フォード１台を購入する。この車を平戸橋から名古屋、挙母方面へ貸し自動車のような形で走らせたが、便乗の申し込みが多かったため、大正２年（１９１３）、宮川幾太郎を代表に「尾三自動車」の名称で事業化した。参画した人物は浦

岡多線の代行を担った
省営バス

(1943)に名鉄自動車と合併した。

岡崎・多治見を結ぶ岡多線(現 愛知環状鉄道)は地域住民の悲願であったが、線路の建設には多額の費用を要することから、鉄道省は鉄道の代行として自動車を検討した。

昭和5年(1930)12月20日、鉄道省は全国初となる省営バスの運行を岡崎・多治見間57・1キロ、瀬戸記念橋・高蔵寺間8・7キロで開始した。これが省営バスの始まりである。

住民にとって待望の開業であったものの地元企業に与えた影響は大きく、並行路線を運行していたバス会社の多くが休業を余儀なくされた。尾三自動車も乗車賃を引き下げざるを得ずして対抗策を講じたが、乗客が激減したため挙母・岡崎間を休止。その後、省営バスが減便したことで住民の間で不満が高まり、岡多線の鉄道建設を求める声が再燃する。そこで鉄道省は路線調査を開始。太平洋戦争の勃発により中断したが、昭和34年（1959）に工事線、同39年（1964）に「国鉄新線」の一つに規定されたことで、ほ場整備のきっかけとながっていった。

四郷初耳話

歴史の香り漂う四郷を巡れば、
そこかしこに先人の息遣いを感じ
る品々や物語が眠っています。



浦野家旧蔵の 「長篠・長久手合戦図屏風」

長篠合戦は天正3年（1575）に三河国の長篠・設楽原（現在の新城市）において織田信長・徳川家康の連合軍が武田勝頼軍を鉄砲隊で打ち破った戦いである。小牧・長久手の戦いは織田信長の後継を巡り天正12年（1584）に羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康の間で繰り広げられた。両戦を一对で描いた「長篠・長久手合戦図屏風」は尾張藩付け家老であった犬山の成瀬家に伝わったもの（成瀬本）が有名で、江戸時代、多くの大名が写本を作成した。その一つ、浦野家旧蔵の屏風は寺部を治めた渡邊家ゆかりのもので、成瀬家から渡邊家の養子となった女性が挙母藩の御用達を務めた浦野家に嫁いだ際、嫁入り道具として持参したと伝わる。

特徴は成瀬本の忠実な模写ではなく、槍の使い手として名を馳せた渡邊半蔵守綱の活躍が強調されている点だ。



浦野酒造

歩けば、四郷の魅力が見えてくる
四郷ぶらりまち散歩

下古屋

■お嶽山散策路（四郷町西山）

かつて御嶽社が祀られていたことからお嶽山と呼ばれる。梅坪城があったのではないかとという説もある。

明治末期、地元住民により88の祠が造られ、弘法さんの石仏を安置したことから「弘法山」とも呼ばれるようになった。麓には本堂が造られ、浦野氏一族により親弘法像3体も祭られ、弘法様の命日には祭りが行われ多くの人で賑わった。

第2次世界大戦中には戦

闘機が隠され、整備器具などを入れる横穴があちこちに掘られていたという。

戦後は荒れた時期もあったが、現在は散策路やベンチが整備され、地元住民の憩いの場、里山として親しまれている。



■弁財天の石碑（四郷町宮下河原）

その昔、籠川の氾濫が起きた際にこの地に流れ着いた石碑を祭ったのではないかと言われる。かつて、現・トヨタ紡織狼投工場西の池に祭ってあった弁才天との説もある。



■旧飯田街道と秋葉山常夜燈（四郷町下古屋）

静岡県の秋葉山は「火防（火伏）の神」として知られ、江戸時代になると民衆が参拝するようになった。下古屋・秋葉山常夜燈は浦野酒造の南側を東西に走る旧・飯田街道沿いに立つ。文政2年（1819）10月吉日の建立とあり、旧・飯田街道の道筋を今に伝えるものとして歴史的価値が高い。



■道満さんの祠（四郷町下古屋）

戦国時代、広瀬城主・三宅右衛門高信らに大学という息子がいた。彼は自らを三宅道満と名乗り花本に居を構えていたが、やがて人を傷つけたり殺めたりしたため捕らえられ、斬首される。道満を哀れに思った村の衆が首を花本、胴体は下古屋に祠を造り、葬ったと伝わる。令和2年（2020）に現在の位置に移され、毎年12月に供養祭が営まれている。



させき 左隻					ろっきよくいっそう 六曲一双					うせき 右隻				
左隻第六扇					左隻第六扇					右隻第六扇				
五					五					四				
四					四					三				
三					三					二				
二					二					一				

豊田市指定文化財「長篠・長久手合戦図屏風」
（浦野家旧蔵、現在は豊田市博物館所蔵）

作者不詳

「六曲一双」縦156.1cm×横350.8cm

左／長久手合戦、右／長篠合戦

<渡邊半蔵守綱>

渡邊半蔵守綱は槍の名手として知られ、家康から「槍の半蔵」の異名をもらい、徳川十六将に数えられた。家康が天下を平定した後は尾張藩主徳川義直に仕え、幕府と尾張藩から領地を与えられる。以後、渡邊家が寺部を治めた。ちなみに、鞍ヶ池（岩滝町）は渡邊家の2代重綱が灌漑用のため池として造らせたもので、池が完成したときに重綱が馬の鞍を投げ入れたことがその名の由来といわれている。



三月廿五日 御泊		御茶	猪口	大根	ちん皮
御菓子		おろし	皿	浅草	焼味噌
皿		いか	平	大椎茸	御吸物
御酒硯蓋		かまぼこ	皮たけ	れんこん	花玉子
同御夜食		猪口	三ツ葉	したし物	平
同廿六日 朝		焼とうふ	はんぺん	小椎茸	干大根
汁		青味	手塩香の物	砂糖餅	
平		すき	わたひ	長芋	ふき
御飯		鯛浜焼			

献立表



伊能忠敬



板垣退助

板垣退助書状

拝啓 陳近は老生貴地訪遊之際は御勸待を被り有難感謝致し候。只今勢地へ食事参着、此間は休神為可候。尚ほ老生が特に諸君に求むる所のは国家の為此際民党の勢力を擴張して大に将来の議会二向て其志望を達する様、ご尽力あらんこと耐ず希榮する時、表可空料、我が国家の為、折角御要用狂を萬にも行つと勿ち言す。

二月 板垣退助
浦野錠平殿

尚お、貴地錠君へも御養擦に為可無だれども行も省り見ず、この際貴家より明日故、御伝聞の程を呉々も御打の者なり。

板垣退助書状（封書）

（表書）
愛知県三河国西加茂郡上郷村
浦野錠平殿

茶 丸の消印
伊勢津 廿五年二月 十日 二便

黒 丸の消印
三河四郷 廿五年二月十二日 二便

（裏書）
三重県安濃津入江町
大観亭ニテ
板垣退助
メ印 赤

浦野酒造に残る板垣退助の書状

下古屋の浦野酒造に板垣退助の手紙が保存されている。三重県津市入江町にある料亭「大観亭」より出されたもので、宛先は愛知県三河国西加茂郡上郷村の浦野錠平、日付は明治25年（1892）2月10日。

手紙には板垣退助が2月初旬に四郷に立ち寄り、浦野家で接待を受けたことへの感謝の言葉が綴られている。さらに、自身が率いる「自由党」の勢力拡張に向けた決意が示されており、当時30代前半であった浦野錠平に対する期待が込められている。浦野錠平はこの時、家業の清酒醸造に取り組む一方で、西加茂郡の郡会議員を務めていた。追伸には手紙が出された日の5日後、2月15日に迫った第2回衆議院議員総選挙について、錠平に地域の票固めを依頼している。

明治22年（1889）2月11日に公布された大日本帝国憲法および衆議院議員選挙法に基づき、第1回衆議院議員総選挙が実施されたのは翌23年7月1日。第1回帝国議会は明治24年12月25日に解散しており、この年、板垣退助は「立憲自由党」から党名を改めた「自由党」党首に就任していた。第2回衆議院議員総選挙では自由党が第一党になれるかの瀬戸際であったが、結果は「自由党」が94議席を確保し、第一党となっている。

浦野錠平はこの手紙から2カ月後の4月には県会議員となり、明治31年（1898）3月には37歳で衆議院議員に当選。その後42歳まで衆議院議員として帝国議会で活躍した。

伊能忠敬測量隊が四郷に滞在

日本全土の地図を作成した江戸後期の地理学者・伊能忠敬一行が四郷へ滞在した際の対応を記した古文書を豊田市郷土資料館が発見した。古文書は孝母城下で庄屋を務めた鈴村家に残っていたもので、忠敬測量隊がやってきた文化8年（1811）3月19日から4月3日までの出来事が詳しく書かれている。表紙は「天文測量方御通行取計向留帳」。

名古屋・平針に前泊した忠敬一行は二手に分かれ、一方は3月25日、四郷村の庄屋・磯右衛門宅に泊まった。古文書によると、庄屋宅ではこの時に昼夜朝の料理を供しており、鯛やすずきのほか、かまぼこ、焼き豆腐、卵などが並ぶ。山うどや蕨、落といった季節の山菜も含まれており、精いっぱいもてなした様子がかがえる。四郷村がこの一晚の接待に使った費用は銭19貫401文（3両程度）で、現在の貨幣価値に換算すると16万円ほど。四郷村では食材の買い出しに岡崎まで走ったり、献立について孝母藩に聞き合わせをしたりしている。また、寝ずの番や測量の手助けなども含め、351人が駆り出されたとある。もともと、この351人という数字はあまりに多すぎるのではないかと研究者は指摘している。

しかし、丁重にもてなされたことは間違いない。孝母の郡奉行所から村々に出された触書には部屋に置く机や硯、燭台の数のほか、出迎えの者の服装に至るまで細かい指示が書かれている。

■延命寺（四郷町六反田）

曹洞宗、ご本尊は地藏菩薩。寛永7年（1630）に浦野溝造、浦野十三の寄進により建立。当時は「十王堂」と称され、浦野家の礼拝堂として維持管理されていた。寛延4年（1751）に作られた村地図にも「十王堂」との記載がある。昭和15年（1940）に十王山延命寺と改称され、現在に至る。毎年2月4日に大般若転讀法会、8月4日に大施餓鬼法会が行われる。



■延命寺の弘法さん（四郷町六反田）

もとはお鍛山にあった弘法さんの石仏が祀られている。昭和38年（1963）にお鍛山の土地所有者が変わったため移転する必要があり、当時の延命寺住職であった仙定尼和尚のご好意によって境内の二画に故・梅村針次氏寄進のお堂が建てられた。平成29年（2017）3月の区画整理事業により現在の場所に移転。毎年弘法大師の縁日である旧暦3月21日に祭りが行われている。



■水無瀬川桜並木（四郷町・井上町）

水無瀬川は以前「唐沢川」と呼ばれていたが、上流の開拓によって水がほとんど無くなり、現在の名で呼ばれるようになった。

天道



■旧・飯田街道と道標（四郷町山畑）

下古屋、浦野酒造の南側を東西に走る旧・飯田街道（中馬道）は天道へと延び、南北に走る柿野街道と山畑で交差する。そこに嘉永3年（1850）に建てられた花崗岩の道標がある。高さ1.5メートルの角柱に刻まれている文字は今の漢字に直すと「右・伊勢宮名古屋道」「左・善光寺道」、もう一面には「左・岡崎道」と判読される。この北40メートルにも道標があったが、豊田市郷土資料館に移築された。





1986年に開館された
「猿投棒の手ふれあい広場」



棒の手キャラクター



四郷棒の手
2023動画



天道棒の手
保存会HP



四郷地区棒の
手保存会HP



下古屋地区の棒の手



四郷八柱神社鳥居



四郷八柱神社

御一新により八王子大明神から 八柱神社に改称

天忍穗耳命(あめのおしほみのみこと)をはじめ8柱を祀る四郷八柱神社は古来「八王子大明神」と称し、籠川の東堤防に接する辺りに鎮座していた。しかし、籠川がたびたび氾濫を起こしていたため明暦5年(1656)に四郷村与茂田の八幡神社境内に仮遷座し、天保4年(1833)に現在の場所へ移る。なお、八柱神社があったことから籠川左岸堤防東側一帯の地名が「宮下河原」になったそうだ。

明治3年(1870)12月、四郷村は孝母藩に「神社祭号其外明細帳」を提出し、村内の神社名と祭神、本殿、拝殿の規模、神社境内面積、祭日、勧請年月等を報告している。この文書には八柱社、八幡宮、素差鳴社、秋葉社(東山)、一王子社、秋葉社(上原西山)の6社が記載され、四郷村の氏神(産土神)である八柱神社については御一新によって「八王子大明神」の呼称を「八柱社」に改称したとある。これは、明治元年(1868)に出された神仏判然令(神仏分離令)に対応したものとみられる。文書には四郷村の村役人であった庄屋鈴木藤治郎、組頭加藤勝平、浦野常助、山田満吉、百姓代浦野鉄治郎の5名が連名で記されている。

秋には五穀豊穡を願う「棒の手警固祭り」が行われ、愛知県無形民俗文化財に指定されている「棒の手」が奉納される。

戦国時代から続く民俗芸能「棒の手」

「棒の手」は農民の自衛手段であった棒術が大永3年(1523)ごろ尾張の岩崎城下で槍・長刀・鎌・太刀などを加えた武技となり、やがて神事芸能に変容したとされる。四郷地区で「棒の手」が盛んに行われたのは江戸中期から明治にかけて。「四郷棒の手保存会」作成の資料によると、昭和3年(1928)の昭和天皇の即位を祝う御大典祭に四郷、花本、御船、荒井、越戸地区が連合して警固祭りを行って以降、太平洋戦争後まで活動が途絶えた。復活するのは「棒の手」が愛知県の無形民俗文化財の指定を受けた昭和33年(1958)以降。翌34年、後の「四郷棒の手保存会」初代会長に福岡金弥氏が就任。

「棒の手」には流派があり、天道に伝わる鎌田流は天正3年(1575)、岩崎城主・丹羽勘助忠次の家臣・鎌田兵太寛信が農具を用いて野武士や野盗に対抗する技を編み出し、農民を指導したのが始まりとされる。天道地区は昭和35年(1960)に杉浦直一氏、近藤龍次氏、杉山藤一氏、福岡栄氏、鳥山良氏、杉浦幾太郎氏、今井一郎氏の7名が発起人となり「棒の手」復活に乗り出した。この頃には「棒の手」に精通する人が地域におらず、鎌田流を伝える宮口一色と猿投の下切に指導を頼むことになったという。なお、平成6年(1994)から女子が参加し、平成18年(2006)には愛知県初の女子の目録取得者を3名輩出している。

下古屋地区の流派は藤牧検藤流で、尾張の今村(現・瀬戸市)から保見地区の篠原を経由して伝わった。剣術を得意とし、演目には無双槍・十手槍・鎖鎌、白龍(2人で刀を扱う)などがある。

■観音堂と弘法さん(四郷町山畑)

お嶽山にあった弘法さんの石仏のうち、天道の分が安置されている。弘法大師の縁日である旧暦の3月21日に祭りが行われている。観音堂は四郷村戸長役場であったが、明治22年(1889)の上郷村との合併で村役場が花本に置かれるようになると、以後は四郷区の集会所として使われていた。



■秋葉山常夜燈と火の見櫓(四郷町山畑)

天道・秋葉山常夜燈は享和3年(1803)の建立。総本山である秋葉山本宮秋葉神社の大祭が12月15日であることから、大祭日前後になると「秋葉講」の代参者が本宮にお参りしてお札を受け、講組の各家庭に配る。火の見櫓は昭和30年(1955)に地元有志16名により建てられ、平成21年(2009)に塗装されるなど大切に保存されている。



■雲龍寺(四郷町山畑)

雲龍寺は水月山雲龍寺といい、聖観世音菩薩(しょうくわんせいおんぼさつ)をご本尊とする曹洞宗の寺である。寛永4年(1627)までは衣村(現・錦町)にあったが、矢作川の氾濫に遭い四郷村寺河原(現・宮下河原)へ移転した。その後、籠川の洪水によりさらに高台を求め、明暦2年(1656)になって現在地に移った。今の本堂は大正11年(1922)に再建された。



■四郷村宝暦義民供養塔(四郷町山畑)

宝暦2年(1752)、孝母城主・内藤丹波守政苗の治政下で重税に苦しんだ村人たちが年貢の減免を訴え出た。申し立ての一部は認められたものの、越訴(おこせ)は大罪であったため代表者6名が孝母で処刑された。四郷村からは小栗紋右衛門、山田林右衛門が犠牲となった。安永8年(1779)の27回忌法要の際に雲龍寺境内に供養塔が建立され、毎年5月に供養が行われている。



井郷ぐるっと
見て歩き



1959	1956	1955	1953	1951	1946	1945	1944	1943	1941	1934	1932	1930	1927	1925	1924	1922	1920
34	31	30	28	26	21	20	19	18	16	9	7	5	昭和2	14	13	11	9
			猿投村から猿投町へ町制施行		第二次農地改革	第一次農地改革		尾三バスが名鉄自動車と合併		尾三バスが小原自動車と合併	三河鉄道猿投駅舎新築	岡崎―多治見間に省営バス岡多線開通	岡崎・多治見間鉄道敷設期成同盟会結成		三河鉄道猿投駅開業	三河鉄道越戸駅開業	三河鉄道挙母駅開業
				挙母町から挙母市へ市制施行 初代市長に渡辺飢吉氏		松平村にB29が墜落する トヨタ自動車工業挙母工場が空襲に遭う	足助、挙母に保健所が開設					「香嵐溪」の名称がつけられる		豪雨により籠川・逢妻川が越水、枝下用水が決壊			
伊勢湾台風により甚大な被害	挙母市から豊田市へ市名変更	3代目市長に長坂貞一氏	2代目市長に中村寿一氏														
安保闘争			白黒テレビの本放送開始	サンフランシスコ平和条約、日米安保条約調印	新選挙法による衆議院総選挙 日本国憲法の公布	三河地震発生	東南海地震発生		アジア・太平洋戦争勃発（昭和20年8月）					ラジオ放送の開始 普通選挙法の公布			

年表・資料編

1916	1914	1913	1912	1911	1906	1904	1900	1897	1894	1892	1890	1889	1874	1864	西暦	和暦	四郷地区内の出来事	豊田市の出来事	一般社会の出来事
5	3	2	明治45 大正元	44	39	37	33	30	27	25	23	22	明治7	元治元			浦野酒造場創業		
信参鉄道計画廃案	尾三自動車株式会社設立	乗合自動車発足（猿投村越戸）	四郷の浦野謙朗氏らがフォード1台を共同購入	井上徳三郎による青木原の開墾事業開始	上郷村と広沢村が合併し猿投村大字四郷村になる 村役場の設置		御料地特売御払下 信参鉄道計画申請	飯田街道の越戸、四郷から名古屋、足助間に駅馬車開通				合併により上郷村に属する	青木学校設立						
		平戸橋―名古屋間で乗合バスの営業開始			各地で町村統廃合					挙母村から挙母町へ町制施行	枝下用水（東用水）完工式を実施 足助村から足助町へ町制施行	愛知県下の各地で町村合併	挙母・大阪（小原）・足助・大津（豊田）・大沼に郵便役所が置かれる						
	第一次世界大戦勃発（大正7年11月）					日露戦争勃発（明治38年9月）			日清戦争勃発（明治28年4月）		府県制・郡制の公布 教育勅語の発布	大日本帝国憲法公布							

2023	2021	2019	2016	2015	2014	2013	2012	2011	2009	2008	2007	2006	2005	2004	2003	2002	2000
5	3	平成31 令和元	28	27	26	25	24	23	21	20	19	18	17	16	15	14	12
組合解散認可	造成工事竣工		造成工事起工式	組合設立認可・組合設立総会	市街化区域編入・都市計画決定	四郷駅周辺土地地区画整理組合発足	四郷駅周辺土地地区画整理組合発起人会		四郷駅周辺土地地区画整理準備会設立		豊田勤労福祉会館閉館	まちづくり勉強会開始	愛知環状鉄道員津駅開業 豊田市西加茂郡2町村、東加茂郡4町村を合併	名鉄三河線三河御船駅、枝下駅、三河広瀬駅、西中金駅の4区間が廃線	北消防署移転新築	あいち豊田農業協同組合発足	
				ラグビーワールドカップ2019開催都市に決定 「新★豊田市誕生10周年プロジェクト」展開		おいでん・さんそんセンター開所	8代目市長に太田稔彦氏		環境モデル都市として国から選定	新とよたプラン21	スカイホール豊田がオープン コム・スクエアがグランドオープン		東海環状自動車道開通 愛・地球博開催	農ライフ創生センター開設 豊田加茂7市町村合併協定調印式			7代目市長に鈴木公平氏 豊田そごう閉店
	東京2020オリンピック・パラリンピック開催	消費税10%導入（軽減税率8%） 新型コロナウイルス感染症発生	熊本地震発生 米オバマ大統領広島市訪問	安全保障関連法成立	消費税8%導入	富士山がユネスコ世界文化遺産に登録	東京スカイツリー開業 山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞受賞	東日本大震災発生	政権交代で鳩山内閣発足		新潟県中越沖地震発生		中部国際空港「セントレア」開港		イラク戦争勃発	学校が完全週5日制になる 日韓共催のサッカーW杯開幕	二千元紙幣発行 九州・沖縄サミット開催

1998	1997	1995	1994	1992	1991	1990	1989	1988	1986	1982	1977	1976	1974	1972	1967	1965	1964	西暦
10	9	7	6	4	3	2	平成元	63	61	57	52	51	49	47	42	40	39	和暦
猿投地区まちづくり協議会発足				愛知県勤労福祉会館移転先として1万2000坪を四郷駅前に確保		猿投農林高等学校南の田7000坪の用地買収、工業団地として造成	愛知環状鉄道新駅構想（現員津駅）	猿投農協カントリーエレベーター竣工式		県道豊田・多治見バイパス国道419号に昇格	419号から西側の四郷駅一帯が農業振興地域に編入		旧・猿投地区県営ほ場整備事業完了		豊田・多治見419号バイパス建設の計画	猿投町が豊田市に合併 猿投土地改良区設立	愛知県住宅供給公社による公営住宅建設	国鉄岡多線工事路線として国の事業化に取り入れられる
豊田市が中核市に移行 参合館に豊田市中央図書館・コンサートホール・能楽堂が開館	国道153号大野瀬トンネルが開通	豊田市駅前東地区市街地再開発ビル「ギャザ」が完成 豊田市美術館が開館	豊田税務署が開署		小原トンネルの開通式が行われる 平成記念橋が開通	足助町福祉センター「百年草」がオープン 自然観察の森がオープン	豊田おいでんまつりが始まる 豊田市運動公園野球場がオープン	6代目市長に加藤正一氏 豊田そごう開店	第三セクター愛知環状鉄道設立			5代目市長に西山孝氏		猿投グリーンロード開通 昭和47年7月豪雨災害	豊田市郷土資料館・民俗資料館が開館	豊田市の市の花が「ひまわり」に決定	4代目市長に佐藤保氏	豊田市の出来事
長野冬季オリンピック開催 サッカーW杯に日本が初出場	消費税5%導入	阪神・淡路大震災発生 地下鉄サリン事件発生	関西国際空港開港 大江健三郎氏がノーベル文学賞受賞		バブル崩壊 湾岸戦争勃発		消費税3%導入 名古屋市中区世界デザイン博覧会開催 ベルリンの壁崩壊	青函トンネル開業 瀬戸大橋開通	男女雇用機会均等法施行	ホテルニュージャパン火災		南北ベトナム統一 ロッキード事件で田中角栄元首相逮捕	佐藤栄作元首相がノーベル平和賞受賞	札幌冬季オリンピック開催 沖縄返還	名神高速道路全通	日韓基本条約締結	東海道新幹線開業 東京オリンピック開催	一般社会の出来事

四郷まちなみアルバム

四郷小学校

豊田市四郷町山畑76-8



昭和50年(1975)4月、豊田市41番目の小学校として青木小学校から分離独立して開校された。児童数が年々増加し昭和59年(1984)には960名25学級となったため、翌年に分離。令和6年(2024)4月現在児童数425名18学級。

豊田市消防本部北消防署

豊田市四郷町森前南6-1



昭和47年(1972)4月、四郷(与茂田交差点東側)出張所が開設される。平成15年(2003)に現在の場所に新築移転し、四郷駅前区画整理事業においては同署をはじめ各種既存施設の機能が最大限生かせるよう計画が進められた。

豊田北郵便局

豊田市四郷町森前南26-2



昭和31年(1956)、四郷交差点付近に国有局舎として新築された猿投郵便局。昭和55年(1980)、現在の地に移転し、豊田北郵便局と改称した。

枝下水護岸工事

四郷を流れる枝下水は農業用水として利用されている。大規模災害時に近隣市街地への広範囲に及ぶ浸水や営農への影響が懸念されることから、防災力を向上させ農業経営の安定維持を図るべく、現在耐震改修工事を行っている。



井郷中学校

豊田市井上町1丁目10-1



昭和61年(1986)に豊田市立猿投台中学校から分離独立して市内20番目の中学校として開校された。井上町の「井」、四郷町の「郷」とつて井郷(いさと)と命名。令和6年(2024)7月現在児童数449名17学級。

井上小学校

豊田市井上町2丁目34



昭和60年(1985)4月、四郷小学校から分離し豊田市49番目の小学校として誕生。青木小学校、四郷小学校に分かれて就学していた児童や保護者らにとつて念願の開校であった。令和6年(2024)4月現在児童数529名21学級。

猿投コミュニティセンター

豊田市四郷町東畑70-1



昭和57年(1982)5月、猿投支所の隣に体育館とふれあい広場を兼ねた建物として竣工。支所と公民館を包括した猿投コミュニティセンターにはコミュニティ会議も結成され、市域のモデルともなった。

下古屋公民館

豊田市四郷町六反田南8-1



昭和53年(1978)12月15日完成、敷地面積150坪、総工費2800万。ほ場整備後の換地過程において資金調達、土地確保がなされ開設された。コミュニティを育む場所としておよそ50年にわたり活用されたが、駅前開発事業の一環でまもなく新しく生まれ変わる。

お鍬山

住民によって樹木の伐採や草刈り、ユキヤナギの植栽といった整備活動が行われ、身近な里山として憩いの場となっている。



旧・飯田街道

浦野酒造南側の細い路地に名残を留める旧・飯田街道。尾張名古屋と信州・飯田を結び、江戸時代から明治の中頃まで中山道の脇街道として塩を運ぶ馬方や旅人で賑わった。住民によって整備され、今なお往時の面影を伝えている。



四郷の歴史

地名の由来

『猿投村史』によれば「四郷村は田糶郷、富田郷、大島郷、深見郷の四郷に亘るによる」とある。今でいう西広瀬からみよし市、梅坪町周辺に囲まれた広大な土地であった。

四郷の歴史は古く、周辺には古墳や遺跡、奈良時代の条里制を思わせる地名の名残もある。奈良県で発掘された当時の豊田地域の木簡（税に付けられた荷札）には「物部氏」の名が見え、歴史上、重要な地であったことが散見される。

「四郷」とその名が歴史に初めて登場するのは貞和5年（1349）の室町時代で、猿投神社『修理米注進状』に「四郷」の文字が見られ、文書での記録としては最古の文献となる。

室町時代地頭であった中条氏、戦国時代の織田氏の支配を経て、江戸時代の徳川4代將軍家綱のころには鳥山牛之助精明四郷代官の陣屋がこの地に置かれた。

明治22年（1889）、市制・町村制の施行により越戸村、花本村、荒井村、四郷村、御船村が合併して上郷村が発足。明治39年（1906）に上郷村、広沢村、富貴下村の一部が合併して猿投村が発足。昭和42年（1967）、豊田市と合併した。

自治区の変遷

明治初年
四郷村
明治22年10月1日合併
上郷村 （四郷村・花本村・荒井村・越戸村・御船村が合併）
明治39年7月1日合併
猿投村 （上郷村・広沢村・富貴下村・内、西枝下・西広瀬Vが合併）
昭和28年4月1日町制施行
猿投町
昭和30年3月1日編入合併
猿投町 （旧・猿投町・石野村・保見村が編入合併）
昭和42年4月1日編入合併
豊田市



寛延4年（1751）、江戸中期8代将軍徳川吉宗の頃に作成された古地図

四郷の人物

歴代区長

【明治中期より昭和19年まで】

浦野宗松 磯貝金四郎 磯村長五郎
磯貝金四郎 福岡正六 磯村伊三郎
宮川伊三郎 浦野穉 三矢周次郎
浦野秀吉 浦野小三郎 宮川正一

浦野鋭平

万延元年（1860）12月23日、四郷村生まれ。幼少のころ雲龍寺住職の筆弟となり、四郷学校に学んだ後に清酒醸造の家業を継ぐ。上郷村長・猿投村長に就任し地方自治発展に尽くしたほか、郡会議員、県会議員、衆議院議員として県政・国政で活躍した。

浦野謙朗

明治15年（1882）3月25日、浦野鋭平の長男として四郷村に生まれる。明治42年（1909）に家督相続。村長として村政に尽力したほか、尾三自動車株式会社等の取締役、に就くなど産業界でも活躍。県会議員、衆議院議員にも当選した。

浦野本一

明治13年（1880）2月8日、四郷下古屋に生まれる。家業は米穀飼料肥料商。西加茂群会議員・猿投村議会議員、村長として地方行政に貢献した。息子の幸男氏は三木内閣の労働大臣として入閣。幸男氏の娘婿である休興氏も村山内閣で国務大臣・科学技術庁長官に就任するなど3代にわたり国政を担った。

【昭和20年以降】

浦野治一（昭和20年）
磯村貴一（昭和21・24・32・39年）
小栗清一（昭和22年前期・30年）
小栗実（昭和22年後期）
岩田才一（昭和23・31・33年）
浦野釺男（昭和25・35年）
福岡金弥（昭和26・28・29・34・41・44年）
磯谷直一（昭和27年）
三矢専一（昭和36年）
福岡時雄（昭和37年）
磯谷到（昭和38・42・46・50・54年）
福岡銃二（昭和40・45年）
浦野銀一（昭和43年）
宮川一夫（昭和47・51年）

磯谷義雄（昭和48年）
小栗鉄夫（昭和49・53・57年）
磯村鋭一（昭和52・58年）
浦野正二（昭和55年）
宮川美代志（昭和56年）
大内秀雄（昭和59年）
福岡増美（昭和60・63・平成元年）
福岡善一（昭和61・62年）
近藤徳美（平成23年）
小栗富保（平成45年）
梅村悟司（平成67・8年）
竹田成章（平成9・10年）
杉山幸夫（平成11・12年）
小栗金夫（平成13・14・15年）
木村安雄（平成16・17年）
三矢宣昭（平成18・19年）
木村潔（平成20・21・22年）
木村駿（平成23・24年）
浦野憲治（平成25・26年）
磯村貴史（平成27・28年）
渡辺昌道（平成29・30年）
梅村孝義（令和元・2年）
加藤勝（令和3・4年）
福岡信明（令和5・6年）

下古屋・天道地区マップ

本書掲載ページ



【下古屋】

- 浦野酒造：P 11・48・49・50・59
- 弁財天の石碑：P 48
- お鍛山散策路：P 48・59
- 旧飯田街道と秋葉山常夜燈：P 49
- 道満さんの祠：P 49
- 延命寺：P 50
- 延命寺の弘法さん：P 50
- 八柱神社：P 52
- 下古屋公民館：P 58
- 北消防署：P 58
- 豊田北郵便局：P 58

【天道】

- 水無瀬川桜並木：P 8・50・51
- アゲハチョウ観察公園：P 9・51
- 旧飯田街道と道標：P 51・59
- 秋葉山常夜燈と火の見櫓：P 52
- 観音堂と弘法さん：P 52
- 雲龍寺：P 53
- 四郷村宝暦義民供養塔：P 53
- 四郷小学校：P 58

【四郷まちづくりのあゆみ編さん委員会】

- 委員長 梅村利幸
- 副委員長 福岡谷雄
- 委員 杉浦克彦 磯村貴史 福岡信明
- 加藤勝 井口太宏 後藤美由喜

【オブザーバー】

森泰通（豊田市役所美術・博物部長）

【取材協力者・資料提供者】 敬称略・順不同

- 福岡銃二 岩本光司 岡本いく子
- 雲龍寺 浦野酒造 延命寺
- JAあいち豊田 愛知環状鉄道株式会社
- 豊田市民芸館 四郷八柱神社 豊田市

【写真提供者】 敬称略・順不同

- 愛知県豊田加茂建設事務所
- 磯村貴史
- 豊田市

P 23 上・下／P 25 上／P 38／P 39 上／P 40 上／P 41／P 43 上・下／P 53 左上
※このほか多くの方から資料提供やご教示をいただきました。謹んでお礼申し上げます。

【参考文献】

- 『上郷・豊田合併50年のあゆみ』豊田市役所 平成29年3月
- 『井ヶ郷 ぐるっと見て歩き』井郷便利帳編集（改定）委員会 令和元年
- 『乗り物の歴史―近代豊田の交通―』豊田市教育委員会 平成11年2月
- 『出発進行！ 愛知環状鉄道―開業までの歩み（新聞報道から）』
- 愛知環状鉄道連絡協議会 昭和63年3月
- 『豊田市都市計画マスタープラン』豊田市 平成20年3月
- 『愛知環状鉄道の10年』愛知環状鉄道株式会社 平成10年3月
- 『愛知環状鉄道の30年 安全で信頼される鉄道を目指して』
- 愛知環状鉄道株式会社 平成31年3月
- 『猿投土地改良区 二十五年の歩み』猿投土地改良区 平成2年12月
- 『設立40周年 猿投土地改良史』猿投土地改良区 平成18年3月
- 『四郷・下古屋誌』四郷・下古屋誌編集委員会 平成12年3月
- 『猿投の遺跡』猿投の遺跡編集グループ 令和3年3月
- 『とよたの人物記3』豊田市教育委員会 平成6年3月
- 『保存版 ふるさと豊田 豊田市制施行60周年記念写真集』株式会社郷土出版社 平成23年3月
- 『写真アルバム 豊田市の今昔』樹林舎 平成29年5月
- 『新修豊田市史概要版 豊田市のあゆみ』豊田市 平成23年3月
- 『豊田四郷駅周辺土地地区画整理事業 完成記念誌』
- 豊田四郷駅周辺土地地区画整理組合 令和5年9月
- 『猿投町誌』猿投町誌編集委員会 昭和43年8月
- 『郷土資料第一編 猿投村史』昭和61年

※このほか自治体の広報誌や新聞記事、ウェブサイトなどを参考にしました。

未来に向けて

古代より多くの人々が行き交った四郷。

現代では高層ビルが立ち並び

住みよく便利になった一方で

昔から慣れ親しんできた自然や伝統が色濃く
残ります。

数々の歴史の舞台となったお鍛山からは

猿投山や四郷のまちなみを眺め

籠川では魚の群れを目にすることができます。

子どもたちがこの豊かな自然と先人が築いた

風土の中で

心と体を育むまちにしていきたいらと

未来を思い描いています。



四郷まちづくりのあゆみ

—— よりよい我がまちをめざして ——

発 行 者 「四郷まちづくりのあゆみ」編さん委員会
発 行 月 令和7年(2025)3月
制 作 株式会社毎日名古屋開発
制作協力 株式会社エンカウント
印 刷 共生印刷株式会社

※禁無断転載 本書の掲載記事および写真の無断転載、複写を固く禁じます。